

児童生徒の資質や能力を高める 指導と評価に関する研究

- 教科の指導において「学力」を適切にとらえるための 評価規準と評価方法の開発を中心に - (第2報)

「指導と評価」研究班 舟山美知 豊田栄治 紺野盛
照井和代 尾澤厚子 小原昭徳
大倉徹 宮康幸 関向正俊

研究協力校

花巻市立宮野目小学校 花巻市立若葉小学校 花巻市立太田小学校
花巻市立桜台小学校 東和町立田瀬小学校
花巻市立宮野目中学校 石鳥谷町立石鳥谷中学校

研究協力員

盛岡市立中野小学校 小山田吉光 盛岡市立東松園小学校 佐藤あい子
花巻市立南城小学校 大森恵子 菅野広紀 花巻市立桜台小学校 山田昭美
東和町立小山田小学校 菊地亨 花巻市立花巻中学校 千田和信 高橋恵美
花巻市立花巻北中学校 橘久美子 北上市立北上中学校 菅原浩樹
岩手県立盛岡第二高等学校 須藤ゆかり 岩手県立花巻北高等学校 及川浩純
岩手県立久慈高等学校 菊池省治

研究の概要

この研究は、「学力」を適切にとらえるための評価規準と評価方法を開発することにより、児童生徒の資質や能力を高める指導と評価について明らかにし、小学校・中学校・高等学校の教科の学習指導の改善に役立てようとするものである。

3年計画で取り組む研究で、その2年次にあたる本年度は、昨年度作成した推進試案に基づき、国語科、社会科、算数/数学科、複式指導(算数科)、音楽科、家庭科、英語科の指導と評価の計画を作成し、授業実践を行い、その結果の分析と考察をとおして、推進試案に基づく指導と評価の計画の妥当性の検討を行った。その結果、指導と評価の計画の妥当性について見通しをもつことができた。

キーワード：資質や能力 学力 指導と評価 学習指導 評価規準 評価方法

研究の目的

新しい学習指導要領は、完全学校週5日制の下、教育内容を厳選し、ゆとりの中で学習指導要領に示す基礎・基本を確実に身に付け、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」を育成することを基本的なねらいとしています。このねらいは、日常の指導と評価の積み重ねによって実現されるものであり、日常の指導のなかで児童生徒の学習状況が適切に評価され、その後の学習に活かされることが重要です。そこで、これからの学習指導においては、この学習状況を適切にとらえるための評価規準と評価方法を開発・工夫するとともに、評価に基づく指導法を改善することが求められています。

そのためには、学力や評価に対する個々の教師の考え方を調査し、それを整理するとともに、児童生徒にはぐくみたい資質や能力等のいわゆる「学力」を適切にとらえる評価の在り方を明らかにする必要があります。また、学習指導では、児童生徒にどのような「学力」を身に付けさせようとするのかを明確にした評価規準を設定し、児童生徒が学習の過程において自分の学習状況に気付き、学習を見つめ直し、その後の学習の改善に役立てることができるように指導と評価を一体的に進めることが必要だと考えます。

そこで、この研究は、「学力」の概念を具体化するとともに、「学力」を適切にとらえるための評価規準と評価方法を開発することにより、児童生徒の資質や能力を高める指導と評価について明らかにし、小学校・中学校・高等学校の教科の学習指導の改善に役立てようとするものです。

研究仮説

全体研究仮説と各教科仮説を次のように考えます。

1 全体仮説

「学力」を適切にとらえるための評価規準と評価方法を開発し、それをもとに学習指導の実践を行えば、児童生徒の資質や能力を高める指導と評価の計画について明らかにすることができるであろう。

2 各教科仮説

教科の指導において、次の3点に基づいた学習指導を推進していけば、児童生徒の資質や能力を高める指導と評価について明らかにすることができるであろう。

各教科における育てたい児童生徒の姿を具体的にすること

適切な評価の方法や用具を用いて児童生徒の目標の実現状況を的確に把握すること

児童生徒の自己実現に結び付く評価をすること

本年度研究の内容と方法

1 研究の目標

児童の資質や能力を高める指導と評価についての推進試案に基づき、各教科の指導と評価の計画を作成します。それをもとに、授業実践を行い、その結果の分析と考察をとおして、推進試案に基づく各教科の指導と評価の計画の妥当性を検討します。

2 研究の内容

(1) 各教科の指導と評価の計画の作成

(2) 指導と評価の計画に基づく授業実践と実践結果の分析・考察

(3) 児童生徒の資質や能力を高める指導と評価に関する各教科の研究のまとめ

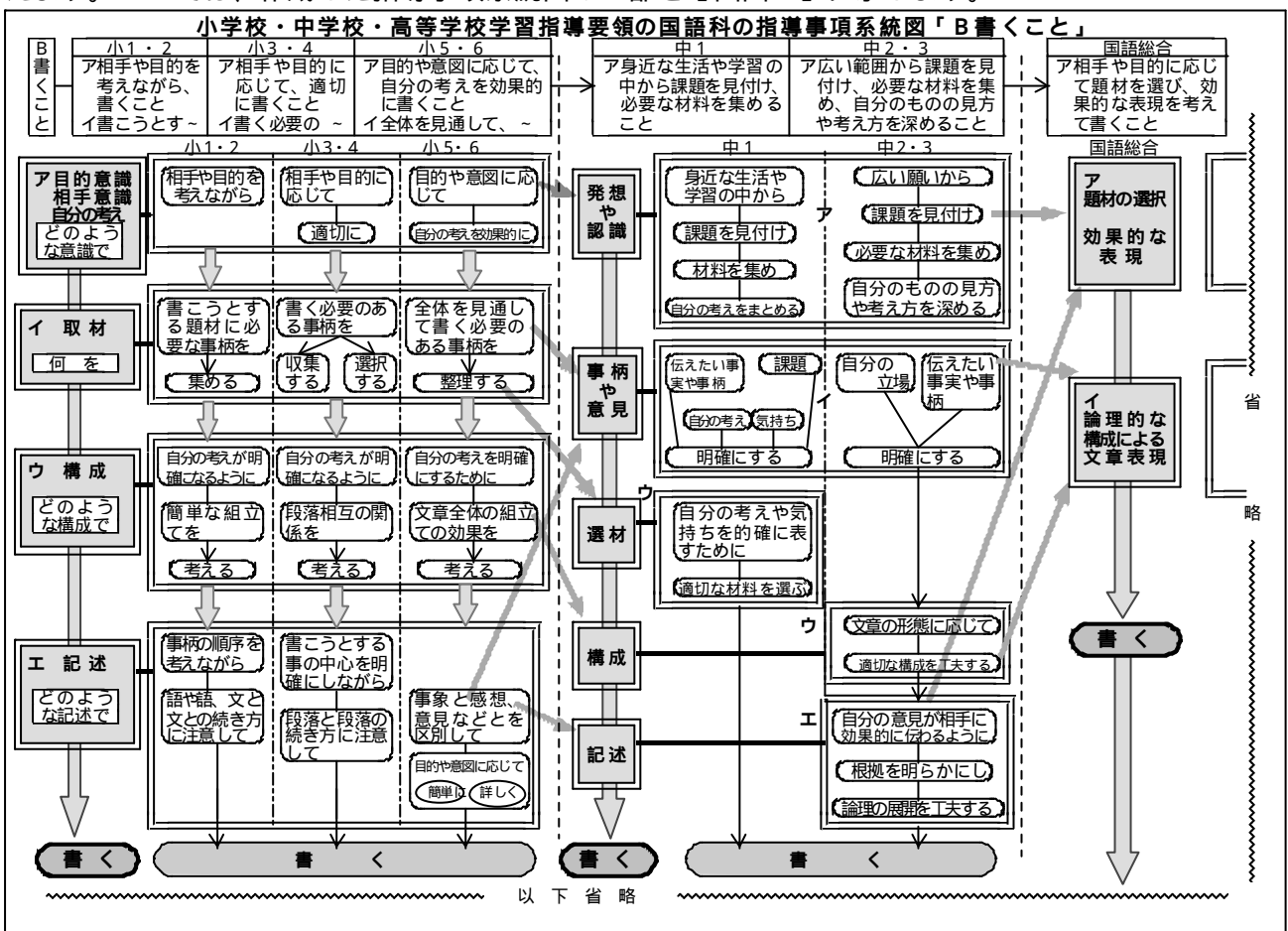
各教科の研究の概要

1 国語科の概要

(1) 国語科における児童生徒の資質や能力を高める指導と評価についての基本的な考え方

ア 国語科における「学力」とは

国語科における「学力」とは、学習指導要領に示されている内容すべてであると考えます。そして、この「学力」を培うためには、学習指導要領に示されている内容を正確に理解し、適切な指導を行うことが大切です。そこで、それぞれの校種において明確な目標をもって指導にあたることができるようにするために、小・中・高等学校の目標の系統図と校種間及び学年間の指導事項系統図が必要と考えます。ここでは、作成した指導事項系統図の一部を【図国1】に示します。



【図国1】指導事項系統図（一部抜粋）

イ 国語科における「学力」を適切にとらえるための評価規準と評価方法の開発について

国語科における「学力」を適切にとらえるためには、国語科の五つの評価の観点に沿って評価規準を作成する必要があります。作成にあたっては、目標を実現した児童生徒の姿を具体的にすること、「いつ」「どこで」「どのように」評価するのかという評価方法を明確にしておくことが大切です。

(2) 国語科の指導と評価の計画

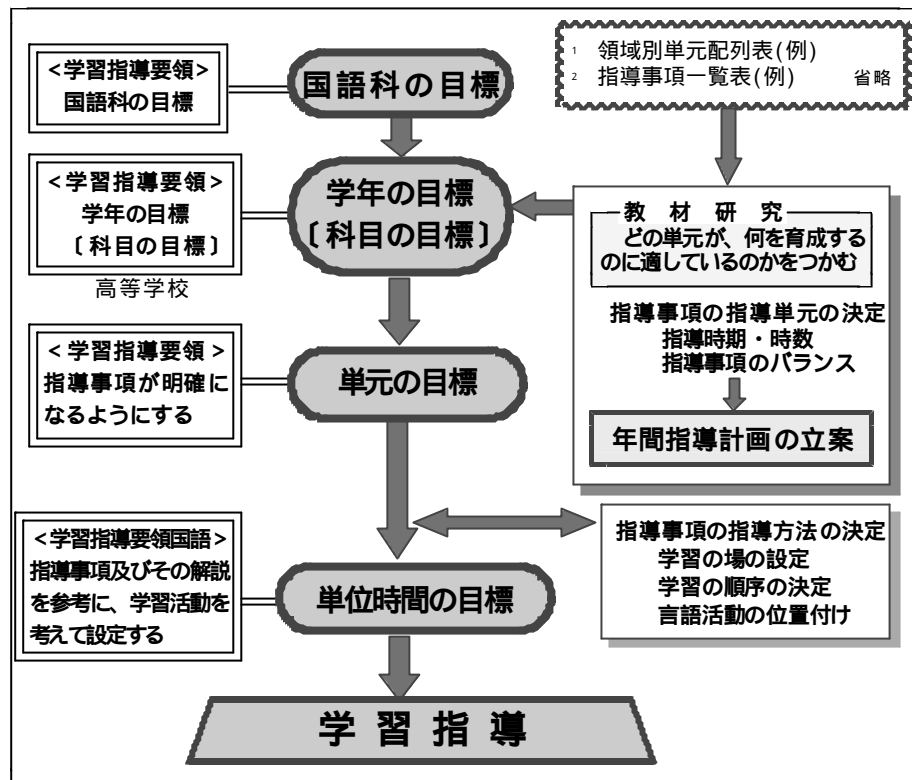
ア 国語科の目標の設定の仕方

国語科の学習指導において設定しなければならない目標は、四つあります。そのうち各学校で設定しなければならないものは、「単元の目標」と「単位時間の目標」の二つです。これらは、領域別単

元配列表と指導事項一覧表（本資料においては省略）に基づいて作成した年間指導計画をもとに、作成します。【図国2】は、目標の設定の仕方をまとめたものです。

「単元の目標」を作成するにあたっては、指導事項を明確にすることが大切です。

したがって、本研究においては、学習指導要領に示されている3領域と1言語事項のそれぞれの指導事項から単元で指導するものを抜き出すことを原則とします。ただし、指導事項の一文をそのまま抜き出す場合といくつかの指導事項の一部を抜き出し、一文で示す場合とがあります。どちらの場合でも、単元の目標をみれば学習指導要領のどの指導事項の学習をするのかが明確に分かるようにすることが大切です。

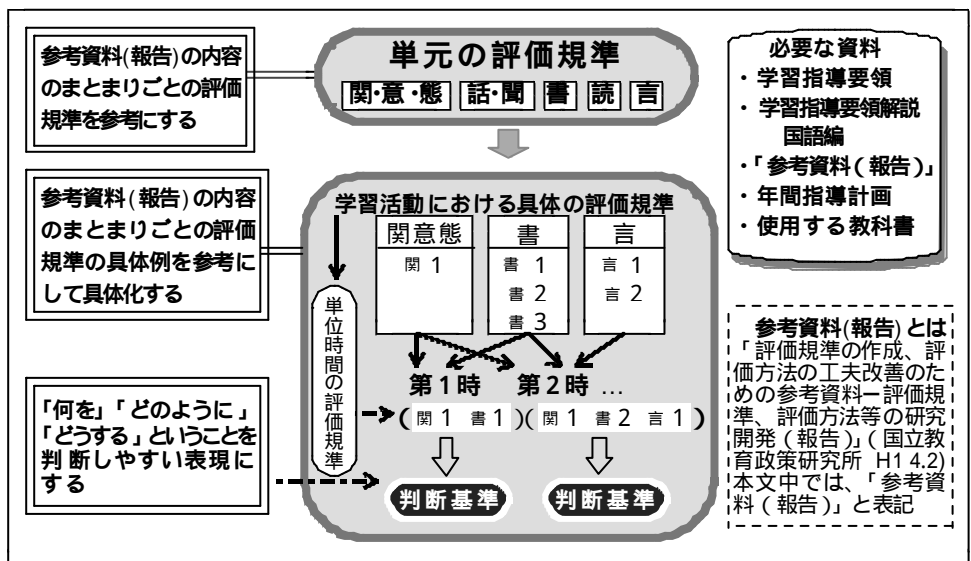


【図国2】国語科の目標の設定の仕方

イ 国語科の評価規準の設定の仕方

評価規準は、国立教育政策研究所の「参考資料（報告）」を参考にして設定します。単元の評価規準は、内容のまとまりごとの評価規準を、学習活動における具体的評価規準は、内容のまとまりごとの評価規準の具体例を参考に作成し、各単位時間に割り振りします。作成にあたっては、「いつ」「どこで」「何を」「どのように」ということを明確にすることが大切です。

【図国3】は、評価規準の設定の仕方をまとめたものです。なお、目標の実現状況をより的確に把握するために判断基準を設定します。「何を」「どのように」「どうする」という簡潔な表現にします。判

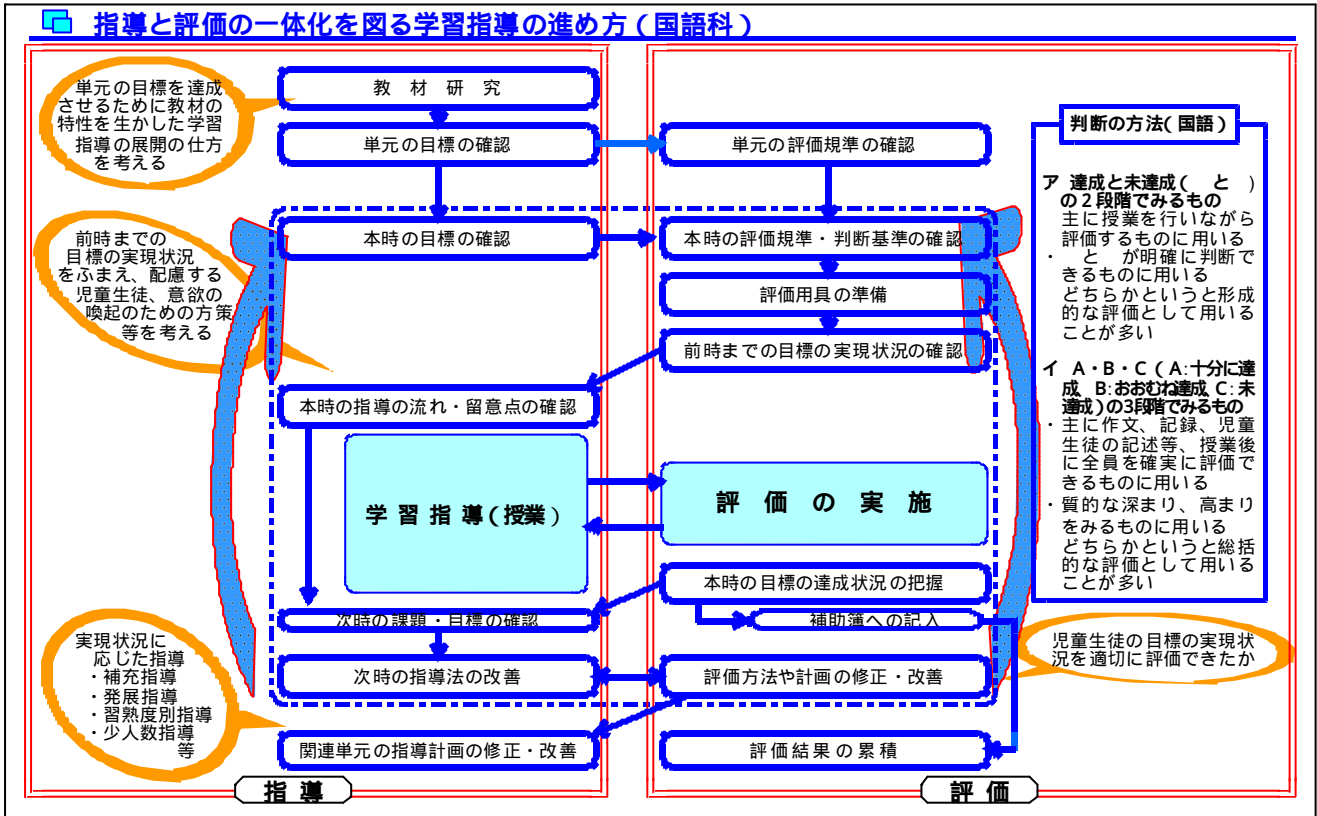


【図国3】評価規準の設定の仕方

断の仕方は、2段階（達成と未達成）でみるものと、3段階（A・B・C）でみるものがあります。

ウ 国語科における指導と評価の一体化を図る学習指導の進め方

児童生徒の「学力」を確実に培うには、個々の目標の実現状況を把握し、その結果に応じた適切な指導を日常的に行う必要があります。そこで、指導と評価の一体化を図る学習指導を【図国4】のようなサイクルで進め、繰り返すことが大切です。



【図国4】指導と評価の一体化を図る学習指導の進め方（授業と評価の流れ）

エ 評価方法

目標の実現状況を的確に把握し、その状況に応じた適切な指導を行うために、計画段階で評価方法等を決定し、必要な用具を準備します。また、その結果の生かし方も明確にしておきます。そこで、はじめに適切な評価をするためのポイントを【表国1】に示します。

次に、本研究において考えた評価方法を次頁【表国2】に示します。評価方法には様々なものがありますが、日常的、継続的に行えるものを中心に考えます。

オ 総括の仕方

総括の仕方の例を次頁【表国3】に示します。なお、国語への関心・意欲・態度については、単元の授業時数等によっては、複数の

【表国1】適切な評価をするためのポイント

項目	内容	工夫
評価時期	「いつ」評価するのか	授業中：座席表へのチェック 挙手等 授業後：記述状況、記録等
評価場面	「どこで」評価するのか	個人作業(学習)中 グループ学習中 一斉指導中
評価方法	「どのように」評価するのか 評価の用具は何か	観察：座席表、チェックシート等 記録：各種カード、作品、ビデオ等 面接：個別、少人数での応答等 テスト：各種テスト
評価の対象	「だれを」評価するのか	全員を でチェック 意図的、計画的に一部の児童生徒 をチェック 具体的な姿がみられた児童生徒のみ チェック
評価内容	何を「どのように」みるのか	・ で判断か ・ A B C で判断か の決定
評価結果の 使い方	「何のために」 評価結果を用いるのか 「どのように」 総括するのか	・ 指導改善のため ・ 評価結果の累積のため ・ その両方 総括の仕方の明確化 ←
評価者	「だれ」の 評価結果を 「どのように」 扱うのか	教師の評価 指導改善 総括の資料 第三者評価 指導改善 総括の補助 資料 自己評価 } 指導改善、補助資料 相互評価 } 児童生徒の意欲付け

単元の評価情報をもとに評価を行い総括していくこともありますが、また、計画段階では予想できなかった顕著な姿がみられる場合もありますので、必要に応じてメモし、計画を修正・改善していくことが大切です。

カ 自己実現に結び付く評価

目標の実現状況を具体的に知らせることは、児童生徒の意欲を高め、自己実現に結び付くと考えます。そこで、指導計画のなかに、学習の状況を知らせる場面を位置付けます。位置付ける場面としては、「単元のはじめ」「単元の途中」「単元の終了時」が考えられます。知らせる目的に応じて場面を決めます。また、その際には、児童生徒にとって、解決の見通しがもてること、解決のための学習の場が明確になっていることが大切です。

(3) 1単元の指導と評価の計画

これまで述べてきた基本的な考え方にに基づき、1単元の指導と評価の計画表と1単位時間の指導と評価の計画表を作成します。作成した1単元の指導と評価の計画表の一部を【表国4】に示します。

【表国4】1単元の指導と評価の計画表（一部抜粋）

国語科 単元の指導と評価の計画表 <中学校第1学年> 単元四 教材名「魚を育てる森」(光村図書)				
単元名	単元の指導と評価の計画			
	単元の目標	・事実と意見を読み分けて、文の構成や展開を正確にとらえ、内容の理解に役立てる(読む) ・文章の展開を確かめながら要旨をとらえる(読工) ・文章に表れているものの方見方や考え方を理解し、自分のものの方見方や考え方を広げる(読オ)		
	学習内容	国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
魚を育てる森	1 事実と意見を読み分ける 2 文章構成の把握 3 意味段落の内容把握 :	1 自分とのかかわりを考えながら、自然や環境についての説明的な文章を興味や関心をもって読んでいる	2 事実と意見を読み分けている 3 文章構成(導入・筆者の疑問とその答え・まとめ)をとらえ、内容を理解している 4 文章の展開を確かめながら要旨をまとめている 以下省略	6 自然や環境に関する語句について、意味を理解している 7 新出漢字(22)・新出音訓(6)を読んでいる 8 既習漢字を書いている
	評価規準()	国語への関心・意欲・態度 読む能力 言語についての知識・理解・技能		
	単位時間ごとの計画	評価規準()・判断基準()		
第1時	事実と意見を読み分けて、文章の構成を- 1 新出漢字の確認 2 全文通読 3 事実と意見の読み分け 4 文章構成の把握	1 自分とのかかわりを考えながら、自然や環境についての説明的な文章を興味や関心をもって読んでいる 1 自分の方見方やこれまで経験してきたことと比べながら自然や環境について知っていること、学んだことなどを話したり、書いたりしている 授業中・後... (観察・学習シート・自己評価カード)	2 事実と意見を読み分けている 2 筆者の思いや気持ちが入っている文や段落に線を引きしている 授業中...(教材文の学習シート) 3 文章構成(導入・筆者の疑問とその答え・まとめ)をとらえ、内容を理解している 3a 筆者の三つの疑問文とまとめの段落に線を引きしている 授業中...(教材文の学習シート)	6 自然や環境に関する語句について、意味を理解している 6 文章に出てくる自然や環境に関する語句の意味がわかる 7 新出漢字(22)・新出音訓(6)を読んでいる 7 新出漢字(22)・新出音訓(6)を読める 8 既習漢字を書いている 8 チャレンジ問題の出題内容をだいたい解いている(一つミスまで) 授業後...(チャレンジ問題)
第2時	文章の展開を確かめながら要旨をとらえる 1 難語句の確認 2 全文通読 3 内容把握(導入・問1) 4 確認テスト	3 文章構成(導入・筆者の疑問とその答え・まとめ)をとらえ、内容を理解している 3b 筆者の疑問に対する答えをとらえている(1/2) 授業中・後...(学習シート)	7 新出漢字(22)・新出音訓(6)を読んでいる 8 既習漢字を書いている 7・8 確認テストの出題内容をだいたい解いている(一つミスまで) 授業後...(確認テスト)	への指導 2・3については、本時のなかで個別にまたは数名集めて指導する(教材文の学習シートに書き込んでいる時間) 7については、新出漢字等の学習シートを配付し、本教材で達成を目指したい学習内容を伝える への指導 3bについては、机間指導で、キーワードやキーワードの探し方を指導する 8については、ノート等に書くときに使用させるようにする
		以下省略	注 3a、3bは、3の評価規準を二つの判断基準でみるということ	:十分満足 :努力を要する

【表国2】評価の観点と評価方法

評価の観点	観察		面接		記録・作品		テスト		参考		
	行動	発言	発言	応答	学習	作品	小	漢	単	定	その他
国語への関心・意欲・態度											
話す・聞く能力											
書く能力											
読む能力											
言語についての知識・理解・技能(書写)											

: 適している : やや適している 空欄: あまり適していない

【表国3】総括の仕方の一例

評価の観点	主な評価方法	補助簿の評価情報	総括の方法	
			単元	学年
国語への関心・意欲・態度	観察 記録・作品 (自己評価)	との累積	との累積 A: すべての- B: がある C: がない 複数単元でA・B・Cをつける場合もある	A: 全学期ともA B: Cがない C: Cがある
話す・聞く能力	観察 面接	との累積 or A・B・C	との累積の場合 A: すべての- B: がある C: がない	A: 全学期ともA B: Cがない C: Cがある
言語についての知識・理解・技能	観察(音声) 記録・作品 テスト	との累積 or A・B・Cの 累積 or 点数	A・B・Cの場合 A・B・Cのとおり 点数の場合 A: 9割以上 B: 8割以上~ C: 8割未満	

(4) 授業実践の概要

作成した指導と評価の計画表に基づく授業実践の概要を【資料国1】に示します。授業は研究協力校にお願いしました。【資料国1】に示したものは、その第2時の様子です。

【資料国1】授業実践の概要(中学校第1学年 単元四「魚を育てる森」 光村図書 花巻市立宮野目中学校)

1 本時の目標(第2時) 文章の展開を確かめながら要旨をとらえる (1/2時間) ☐部分は、評価結果を受けて工夫したこと		前時の授業から 難語句として印をつけたものは、「大形魚」「底部」「着手」等、 自然・環境関係の用語だけではないこと 「事実」と「考え」の区別の根拠がわからない生徒が数人いること			
主な学習内容	生徒の活動 前時を生かした指導	判断基準	評価方法	評価の視点からみた 授業の様子・結果等	
導入	1 本時の目標の確認 2 難語句の確認 3 全文の音読	・生徒の活動 前時を生かした指導 ・前時の結果を受けて、本時の目標を確認する ・難語句の意味を理解する 前時を生かした指導 難語句として生徒が印をつけた言葉を黒板に貼る。既習漢字については、訓読みをすることによって意味が推測できることを話す。 ・文章全体の構成を確認する 前時を生かした指導 前時の教材の学習シートを黒板に貼り、文末部分に注目することが大事であることを話す。 ・全員が交替で音読する	≧6 自然や環境に関する語句の意味が分かる ≧7 新出漢字・新出音訓が読める	観察(中) 観察(中)	<観察> ・配慮すべき生徒を中心にみたが、理解の程度まではみることができない。理解の状況を改めてテスト等で把握する必要がある <観察> ・音読の際に、漢字の読みの状況を大まかに把握したが、読んだ一部分から全体の読みの状況を判断するには、限界がある。漢字テスト等で後日再確認する必要がある
展開	4 導入部分の内容確認 5 「問1」の「答え」さがし	・時を表す言葉に注意しながら、学習シートに記入する ・教師の発問に答えながら、導入部分の内容を理解する 襟裳岬の様子をまとめる 今 クロマツの針葉樹林帯 50年前 襟裳砂漠(砂地・砂山) 江戸時代まで 広葉樹が生い茂る大森林地帯	≧1 自分の考え方やこれまで経験してきたこととを比べながら自然や環境について知っていること、学んだことなどを話したり、書いたりしている ≧3b 筆者の問いに対する答えを抜き出している	観察(中) 学習シート(後)	<観察> ・発言の場面はあったが、内容について答えたり、書いたりするものが中心であったので、自分の考え等を発表したり書いたりする場面がなく、ここでは把握できなかった。評価場と判断基準についての検討が必要である <学習シート> ・教師が模範解答を示すまで記入しない生徒が数名いた。結果の記録だけでなく、考えたり、確認したりするためにノートやシートを使わせたい
終末	6 確認テスト 7 次時の学習内容の確認	・確認テストをする 問題用紙は、ここでは省略 ・次時は「問2」「問3」の答えをさがすことを確認する	≧6 自然や環境に関する語句の意味が分かる ≧7 新出漢字・新出音訓が読める ≧8 既習漢字を書ける ≧3b 筆者の疑問に対する答えをとらえている	確認テスト(後)	<確認テスト> ・テストは、本時の学習内容に合わせて作成した。内容の理解状況を見るための作題の仕方について、さらに工夫・改善していきたい ・既習漢字の書き取りは達成率43.3%であった。授業のなかでできるだけ既習漢字を使って書かせるようにするとともに、全く書けない生徒には、個別に助言する

(5) 国語科の研究のまとめ

第2年次である今年度は、昨年度作成した推進試案に基づき、国語科における指導と評価についての基本的な考え方をまとめ、国語科の指導と評価の計画を作成し、授業実践を行いました。その結果、小・中・高等学校の指導事項系統図を作成し、身に付けさせなければならないことを明らかにすることができました。また、目標の設定の仕方と評価規準の設定の仕方を整理し、国語科の指導と評価の一体化を図る学習指導の進め方についてまとめ、指導と評価の計画表を作成することができました。

今後は、指導と評価の計画表の工夫や国語への関心・意欲・態度の評価の仕方について検討を加えながら、児童生徒に確実に「学力」を培うための指導と評価の一体化を図る学習指導をさらに効果的に進められるようにしていきたいと考えています。

【主な参考文献】

- 佐野金吾・小島宏編著、「新しい評価の実際」1～2、ぎょうせい、2001年
- 辰野千壽著、「改訂増補 学習評価基本ハンドブック」、図書文化、2001年
- 梶田叡一著、「教育評価(第2版補訂版)」、有斐閣双書、2002年

2 小学校社会科の概要

(1) 社会科における児童の資質や能力を高める指導と評価についての基本的な考え方

社会科における「学力」とは

平成10年7月の教育課程審議会答申において、次のような学習指導要領改善の基本方針が示されています。

- ・小学校、中学校及び高等学校を通じて、日本や世界の諸事象に関心をもって多面的に考察し、公正に判断する能力や態度、我が国の国土や歴史に対する理解と愛情、国際協力・国際協調の精神など、日本人としての自覚をもち、国際社会のなかで主体的に生きる資質や能力を育成することを重視して内容の改善を図る。
- ・児童生徒の発達段階を踏まえ、各学校段階の特色を一層明確にして内容の重点化を図る。また、網羅的で知識偏重の学習にならないようにするとともに、社会の変化に自ら対応する能力や態度を育成する観点から、基礎的・基本的な内容に厳選し、学び方や調べ方の学習、作業的、体験的な学習や問題解決的な学習など児童生徒の主体的な学習を一層重視する。

また、学習指導要領（平成10年12月）に示されている小学校社会科の各学年の目標は、共通して次のように構成されています。

学年の目標は、それぞれ(1)から(3)の3項目から構成されています。(1)と(2)のそれぞれ前半の部分には、理解に関する目標が示され、後半の部分には、態度に関する目標が示されています。このことは、理解に関する目標と態度に関する目標が一体的に身に付くようにすることを目指しており、社会的事象についての確かな知識・理解を図りながら、社会的事象に対する関心や意欲を高め、自らの「生きる力」にかかわって、望ましい態度を形成することを意図しているものと考えられます。

また、(3)には能力に関する目標が示されています。このことは、社会的事象を観察する力や調査する力はもとより、各種の資料を活用する力、表現する力をはじめ、社会的な思考力や判断力などの諸能力を学年の発達段階に応じて段階的に育てることを意図しているものと考えられます。

第3学年及び第4学年を例にしますと、次のようになっています。

- (1) 地域の消費生活の様子、人々の健康な生活や安全を守るための諸活動について理解できる（理解）ようにし、地域社会の一員としての自覚をもつようにする。（態度）
- (2) 地域の人的環境、人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できる（理解）ようにし、地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする。（態度）
- (3) 地域における社会的事象を観察、調査し、地図や各種の具体的資料を効果的に活用し、調べたことを表現するとともに、地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力を育てるようにする。（能力）

以上のことから、社会科における児童に身に付けさせたい学力は、学習指導要領に示されている社会的な事象についての知識・理解や関心・意欲・態度、社会的事象を観察する力や調査する力、各種の資料を活用する力、表現する力、社会的な思考力や判断力等の理解、態度、能力のすべてととらえられます。

そこで、本研究においては、学習指導要領に示されている理解、態度、能力のすべてを社会科において育てたい学力ととらえ、これを社会科における「学力」と表記することとします。

(2) 小学校社会科の指導と評価の計画

ア 社会科における育てたい児童の姿を具体的にすること

社会科の目標を実現するためには、評価する内容を明確にし、「単元の目標の評価規準」と「単位時間の（学習活動における具体の）評価規準」の二つを設定する必要があります。また、目標が実現されているかどうかを判断するための判断基準及び評価方法を設定します。

イ 内容のまとめりごとの評価規準の具体的な設定の手順

【図社1】は、社会科の評価の観点及びその趣旨から、内容のまとめりごとの評価規準の設定を第5学年を例として示したものです。

教科目標と評価の観点及びその趣旨			
教科目標	社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質を養う。		
評価の観点	社会的な思考・判断	観察・資料活用の技能・表現	その趣旨
社会的な事象への関心・意欲・態度	社会的な事象から学習の問題を見いだして追究・解決し、社会的な事象の意味を考え、適切に判断する。	社会的な事象を的確に観察・調査したり、各種の資料を効果的に活用したりするとともに、調べたことを表現する。	社会的な事象の様子や働き、特色及び相互の関連を具体的に理解している。
第5学年目標と学年の評価の観点の趣旨			
第5学年目標	(1) 我が国の産業の様子、産業と国民生活との関連について理解できるようにし、我が国の産業の発展に関心をもつようにする。 (2) 我が国の国土の様子について理解できるようにし、環境保全の重要性について関心を深めるようにするとともに、国土に対する愛情を育てるようにする。 (3) 社会的な事象を具体的に調査し、地図、統計などの各種の基礎的資料を効果的に活用し、調べたことを表現するとともに、社会的な事象の意味について考える力を育てるようにする。		
第5学年の評価の観点	社会的な思考・判断	観察・資料活用の技能・表現	その趣旨
社会的な事象への関心・意欲・態度	我が国の産業と国土の様子に関する社会的な事象から学習の問題を見いだして追究・解決し、社会的な事象の意味を考え、適切に判断する。	我が国の産業と国土の様子に関する社会的な事象を的確に調査したり、地図、統計などの各種の基礎的資料を効果的に活用したりするとともに、調べた過程や結果を目的に応じた方法で表現する。	我が国の産業の様子、産業と国民生活との関連及び我が国の国土の様子を理解している。
内容のまとめりごとの学習内容と評価規準（内容の(3)我が国の通信などの産業を例として）			
内容のまとめりごとの学習内容	(3) 我が国の通信などの産業について、次のことを見学したり資料を活用したりして調べ、これらの産業は国民の生活に大きな影響を及ぼしていることや情報の有効な活用が大切であることを考えるようにする。 ア 放送、新聞、電信電話などの産業と国民生活とのかわり イ これらの産業に従事している人々の工夫や努力		
評価規準（上段）	社会的な思考・判断	観察・資料活用の技能・表現	その趣旨（下段）
社会的な事象への関心・意欲・態度	我が国の通信などの産業の様子から学習の問題を見いだして追究・解決し、国民の生活に大きな影響を及ぼしている通信などの産業の意味を考え、適切に判断する。	我が国の通信などの産業の様子を的確に見学したり、各種の基礎的資料を効果的に活用したりするとともに、調べた過程や結果を目的に応じた方法で表現する。	社会的な事象についての知識・理解
我が国の通信などの産業に関心をもち、それを意欲的に調べ、国民生活を支える通信などの産業の発展について関心を深める。	放送、新聞、電信電話などの様子について問題意識をもち、学習の見通しをもつて追究・解決している。 調べたことをもとに、我が国の通信などの産業が国民の生活に大きな影響を及ぼしていることを考え、適切に判断している。 調べたことをもとに、情報の有効な活用が大切であることを考え、適切に判断している。	放送、新聞、電信電話などの産業と国民生活とのかわりを見学、調査したり、各種の基礎的資料を活用したりして具体的に調べている。 放送（新聞、電信電話）にかかわる仕事に従事している人々の工夫や努力を、見学したり、各種の基礎的資料を活用したりして具体的に調べている。 調べた過程や結果を目的に応じた方法で表現している。	我が国の通信などの産業は国民生活に大きな影響を及ぼしていることや情報の有効な活用が大切であることを理解している。 放送（新聞、電信電話）にかかわる仕事に従事している人々の工夫や努力が分かっている。

【図社1】内容のまとめりごとの評価規準の設定の例

(3) 小学校社会科の1単元の指導と評価の計画

(第5学年 教出下 3暮らしを支える情報 2情報を伝える人々を例として示します)

ア 適切な評価の方法を用いて児童の目標の実現状況を的確に把握すること

(ア) 適切な評価の方法

「学力」を観点別に評価しようとするれば、それぞれの観点にあった評価方法を選択しなければなりません。様々な評価方法が考えられますが、本研究の実践においては【表社1】に示す評価方法を用いることとします。

【表社1】本研究における評価方法

観点別学習状況の評価標準	主な評価方法
社会的事象への関心・意欲・態度 通信などの産業の様子に関心をもち、それを意欲的に調べることを通して、国民生活を支える通信などの産業について関心を深める。	評定法 (ノート《学習プリント》への記述、ふり返りカードへの感想の記述)
社会的な思考・判断 通信などの産業の様子から学習の問題を見いだして追究・解決し、国民の生活に大きな影響を及ぼしている通信などの産業に従事している人々の工夫や努力について考え、適切に判断する。	評定法 (ノート《学習プリント》への記述、ふり返りカードへの感想の記述、見学のしおりへの記述) 観察法 (見学の様子、発表の仕方)
観察・資料活用技能・表現 通信などの産業の様子を的確に見学したり、各種の基礎的資料を効果的に活用したりするとともに、調べた過程や結果を自分なりの方法で工夫して表現する。	評定法 (見学のしおりへの記述) (ポスター) 観察法 (発表の聞き方)
社会的事象についての知識・理解 通信などの産業にかかわる仕事に従事している人々の工夫や努力を具体的に理解している。	評定法 (ノート《学習プリント》への記述) (ポスター) テスト法 (単元テスト)

(イ) 適切な評価の用具

評価の用具とは、目標の実現状況を把握し判断するためのカードやチェックリストなどの用具と考えます。本研究の実践においては、その用具として、ノート《学習プリント、見学のしおり》、ふり返りカード、ポスター、単元テストを用いることとします。

ノート《学習プリント、見学のしおり》について

ノート《学習プリント、見学のしおり》は、児童の記述内容から、その時間の目標の実現状況を把握するために用いるものです。単元のどの時間にどの観点に従って実現状況を把握していくのかを単元の指導と評価の計画に位置付けていくこととします。


ふり返りカードについて

【図社2】はふり返りカードの抜粋です。このカードは、単位時間の終わりに、その時間の学習を振り返り記述式で答えるものとします。ふり返りカードの記述内容は、「関心・意欲・態度」、「思考・判断」、「技能・表現」、「知識・理解」のなかから、2観点程度とし、特に、単元の「関心・意欲・態度」を評価する際の資料として活用していきます。

「情報を伝える人々」ふり返りカード

番 氏 名

「気象情報が伝えられるまで」のことや「テレビのニュース番組」のことを学習して、どのようなことがわかりましたか。	次の時間は、どのようなことを勉強してみたいですか。
_____ _____ _____ _____	_____ _____ _____ _____



【図社2】ふり返りカードの抜粋

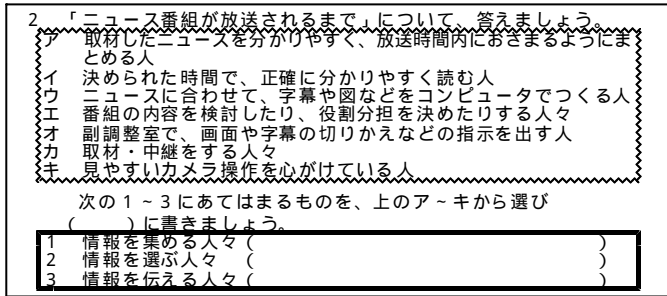
ポスターについて

本研究の実践では、見学のまとめをポスターセッションの形式で行うこととします。そこで、作成したポスターを用いて、「技能・表現」、「知識・理解」の二つの観点について、把握することとします。

単元テストについて

【図社3】は本研究の実践における研究者自作の単元テストの抜粋です。

本実践の単元は短時間の単元であることから、単元テストでは、「知識・理解」の観点を把握することとし、単元の最後の時間に実施します。



【図社3】単元テストの抜粋

イ 1単元の評価規準の具体的な設定の手順

【図社4】は、内容のまとめりごとの指導と評価の計画をもとに、1単元の評価規準の設定を「第5学年 教出下 3 暮らしを支える情報 2 情報を伝える人々」を例として示したものです。

内容のまとめりごとの学習内容と評価規準	
単元の目標と評価規準(関心・意欲・態度・知識・理解を例として)	
単元の目標	我が国の情報産業について調べ、そこで働く人々の工夫や努力をとらえることにより、情報産業と国民生活とのかかわりに関心をもつことができるようにする。
観 点 別 の 目 標 (上 段)	観 点 別 の 評 価 規 準 (下 段)
社会的な事象への関心・意欲・態度	社会的な事象についての知識・理解
生活のなかの様々な情報に関心を持ち、情報を発信する人々の様子について進んで追究しようとする。通信などの産業の様子に関心を持ち、それを意欲的に調べることを通して、国民生活を支える通信などの産業について関心を深める。	情報を発信する人々の工夫や努力などについて理解することができる。通信などの産業にかかわる仕事に就いている人々の工夫や努力が分かる。
単位時間ごとの目標と評価規準・判断基準(第1時)	
単位時間の目標	気象情報がどのようにして伝えられているかを調べ、そのなかからテレビニュースに焦点をあて、ニュース番組作りを調べる意欲をもつ。
評 価 規 準 (上 段)	判 断 基 準 (下 段)
社会的な事象への関心・意欲・態度	社会的な事象についての知識・理解
テレビニュースに関心を持ち、ニュースづくりを調べたい。テレビニュースの番組の回数が多い。短い時間のニュースの内容を詳しく調べたい。	気象情報がどのようにして伝えられているのかが分かる。テレビ、新聞、ラジオ、電話、インターネットなどの情報を取り上げ、気象情報が伝わるまでの過程をまとめる(ノートへの記述)

【図社4】1単元の評価規準の設定の例

ウ 単元の学習の総括

単元の学習の総括については、各単位時間の観点別の学習状況に基づき、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の4観点で総括するものとします。【表社2】は、単元の学習の総括について、「関心・意欲・態度」「思考・判断」について例を示したものです。

【表社2】1単元の評価規準の設定の例

関心・意欲・態度	思考・判断
第1時をABCで評価する。また、第1時及び単元の感想をABCで評価する。単元の感想がAであり、他の二つがB以上である児童は十分満足、単元の感想がBで他の二つのうちBが一つ以上である児童はおおむね満足ととらえる。	第2、3・4、5時をABCで評価する。Aが二つでBが一つ以上の児童は十分満足、Bが二つでCが一つ以上の児童はおおむね満足ととらえる。

また、単元の学習の総括にあたっては、【図社5】に示すチェックリストを用いることとします。チェックリストは、単位時間の終了後にA(十分満足) B(おおむね満足) C(努力を要する)で記入し、単元の終了後に観点ごとに総括することとします。

2 「情報を伝える人々」チェックリスト																									
関・意・態					思考・判断					技能・表現					知識・理解										
第1時	第1時感想	第2時	単元の感想	単元テスト	観 点 別 総 括	第2時	第3・4時	第5時	単元テスト	観 点 別 総 括	第3時	第5時	第5時感想	第6時	単元テスト	観 点 別 総 括	第1時	第1時感想	第2時	第2時感想	第5時	第5時感想	単元の感想	単元テスト	観 点 別 総 括
1																									
2																									
3																									
4																									
5																									

【図社5】1単元のチェックリストの例

エ 目標の実現状況を児童個々へ知らせること

本研究における実践において、目標の実現状況を児童個々へ知らせる段階を、「単位時間のなか」「単位時間の終了後」「単元の終了後」の三つの段階とします。各段階で児童へ知らせる方法や内容を示したものが【表社3】です。

【表社3】目標の実現状況を児童個々へ知らせる方法と内容

<p>単位時間のなかで目標の実現状況を知らせること 本研究の実践では、単位時間のなかで児童個々へ目標の実現状況を知らせる方法として、「赤ペン」を持ち、机間指導をしながら丸を付ける方法を用いることとする。児童へは、二重丸は「B よくできた(おおむね満足の状況)」、三重丸以上は「A とてもよくできた(十分満足の状況)」という意味であることを事前に知らせておく。 また、机間指導をしながら、記述の状況が「おおむね満足の状況 B」に達していない児童には、個別の指導を行い、「A 十分満足の状況」の児童には次の段階への指示を与えることとする。</p>
<p>単位時間の終了後に目標の実現状況を知らせること 単位時間の終了後には、ノート(【学習プリント】【見学のしおり】【ふり取りカード】)を集め、児童の記述を評価する。評価にあたっては、単位時間と同様に丸の数によって目標の実現状況を知らせる。記述の状況が「B おおむね満足の状況」に達していない児童には、次時までに補充の指導を行うこととする。</p>
<p>単元の終了後に目標の実現状況を知らせること 単元の終了後に、単位時間の目標の実現状況を総括した結果を児童に知らせる。このときには、個々に「よくできている観点」を知らせ、次單元への意欲付けを図るとともに、4観点のなかで「努力を要する状況 C」にとどまっている観点については、振り返りの視点を与え、補充指導を行うこととする。</p>

オ 評価結果に応じた指導計画の修正・改善を図ること

評価は、教師にとっては、児童が目標の実現に向けて、どのような点でつまづいているのかを把握し、教師自身の指導や経過を振り返るための材料にもなるものです。単位時間の評価結果が思わしくない状況にあるときには、単位時間の指導内容、指導方法等の修正・改善を行い、単元の評価結果が思わしくないときには、単元、年間の計画の修正・改善を行うことが大切です。

(4) 小学校社会科の1単位時間の指導と評価の計画

ア 1単位時間の評価規準の具体的な設定の手順

【図社6】は、1単位時間の指導と評価の計画の例を示したものです。

<p>単位時間の指導と評価の計画 単元名「情報を伝える人々」 1 ねらい 気象情報がどのようにして伝えられているかを調べ、そのなかからテレビニュースに焦点をあて、ニュース番組づくりを調べる意欲をもつ。 2 展開(は判断基準に達しなかった児童、 は判断基準に達した児童への指導を示す)</p>		1 / 6時		
段階	学習活動	指導上の留意点	具体的評価規準	判断基準・評価方法
問題の把握	1 天気予報のビデオを見て、気象情報に興味・関心をもち、気象情報を何のために、何から得ているか話し合う。 気象情報が、どのようにして伝えられているか調べてみよう。	自分たちの生活と気象情報のかかわりをつかませ、テレビのニュース番組を調べる意欲につなげたい。		
問題の追究	2 教科書の図をもとに、気象情報がどのようにして伝えられているかを調べ、発表する。	気象情報が伝えられる過程をまとめることができない児童には、テレビ、新聞、ラジオ、電話、インターネットのどれか一つに着目させ、調べさせる。調べることができた児童には、発表の準備をさせる。	気象情報がどのようにして伝えられているかが分かる。 【知識・理解】	テレビ、新聞、ラジオ、電話、インターネットなどのなかから一つを取り上げ、気象情報が伝わるまでの過程をまとめている。 (シートへの記述)
まとめ	4 本時の学習の振り返りをする。 (1) 振り返りを学習カードに書く。 (2) 振り返りを発表し合う。	振り返りは次の観点でまとめさせる。 対する感想 次時にやってみたいこと 数人に発表させ、次時の学習の意欲付けを図る。	分かったことや疑問に思ったこと	分かったこと

【図社6】1単位時間の指導と評価の計画の作成の例

(5) 小学校社会科の研究のまとめ

ア 児童の資質や能力を高めるための指導と評価を行ううえで、社会科における「学力」を適切にとらえるための評価規準や評価方法を位置付けた指導と評価の計画は妥当であるという見通しをもつことができたこと

イ 判断基準の設定について、検討を行い、一つ一つの観点を確実に把握できる内容とすること

【主な参考文献】

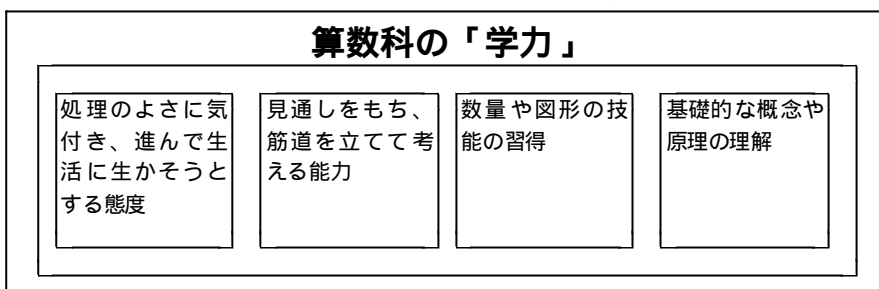
北尾 倫彦・桑原 利夫 編著、「小学校社会科 観点別学習状況の新評価規準」、図書文化、2002年

3 算数/数学科の概要 (ここでは、算数科の概要について述べます)

(1) 算数科における児童生徒の資質や能力を高める指導と評価についての基本的な考え方

ア 算数科における「学力」とは

本研究においては、基礎的・基本的な内容に関する知識や技能だけではなく、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、論理的に考える力なども含めた力を、算数科において育てたい学力ととらえ、これを、算数科における「学力」と表記することとします。この算数科における「学力」を、教科の目標との関連

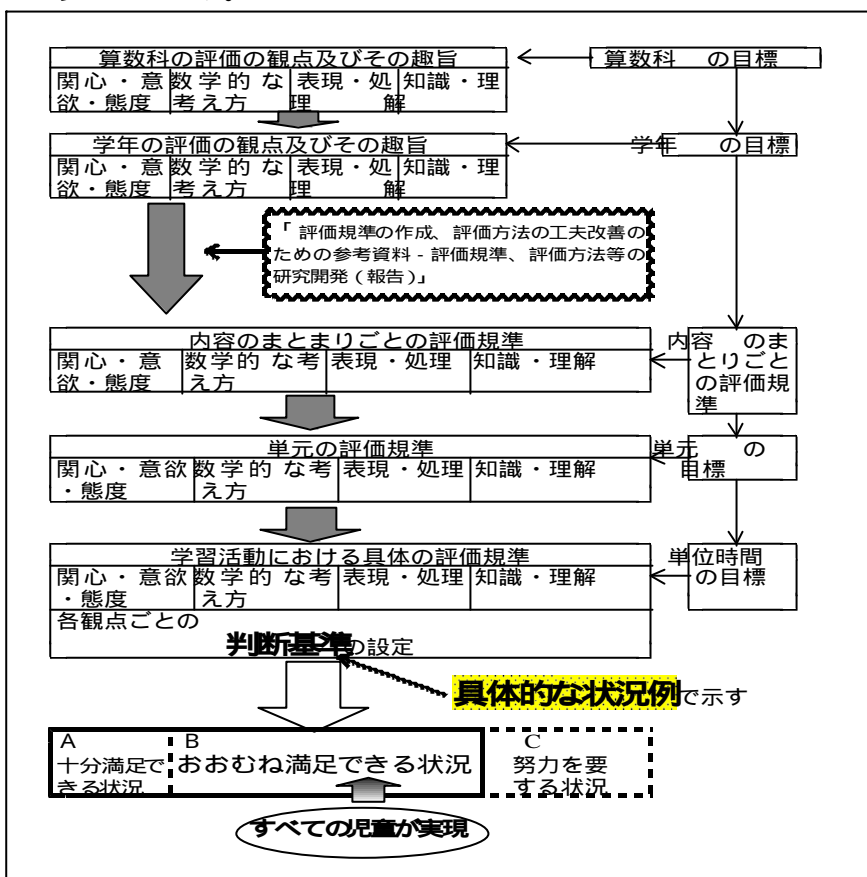


【図算1】算数科の「学力」

で整理してみると、【図算1】のようになります。

イ 算数科における育てたい児童の姿を具体的にすること

算数科の目標を実現するためには、評価する内容を明確にし「単元の目標の実現状況を把握するための評価規準」と「単位時間の（学習活動における具体的な）評価規準」の二つを設定する必要があります。そして、設定した評価規準が実現されているかどうかを判断するための判断基準を設定します。そのとき、判断基準は具体的な状況例で示す必要があります。



【図算2】評価規準の設定の手順

ウ 適切な評価の方法について

「学力」を観点別に評価するためには、それぞれの観点にあった評価方法を選択しなければなりません。様々な方法の選択が考えられますが、本研究においては、それぞれの観点を的確に把握できるように観察法、作品法、学習感想による評定法、自己評価法、テスト法を用います。

エ 適切な評価の用具について

(ア) 自己評価カードについて

自己評価カード (次頁【表算1】参照) は、児童に、学習活動における4観点の具体的な評価規準を

示して「おおむね満足できると判断できる状況」を【表算1】自己評価カードの例

認識させることにより、児童一人一人にその単元に身に付けさせたい基礎的・基本的な学習事項の確実な定着を図らせるものです。具体的評価規準だけでは、児童は具体的な状況を判断することができないので、更に「だいたいできたの具体例」を示し、授業場面での「おおむね満足できると判断できる状況」を具体的な状況（具体的な姿や行動）として児童が判断できるように示しています。

		完全にできた	だいたいできた	まだよくできない
項目	評価規準	だいたいできたの具体例		評価
関心	仮商が立てやすい、わる数の処理の仕方を考えようとしている	87÷25の計算で、25の表し方を工夫することで商が立てやすくなるかを考えようとした		

(1) 評価一覧表（座席表）について

評価一覧表は、授業内における評価を、授業後に記入するものです。児童全員を、授業内で評価して記入することは時間的に困難であり、評価のための授業に陥る危険性があります。そこで、評価一覧表は座席表の形式をしており、指導に生かす評価の補助簿として活用します。

(2) 算数科の1単元の指導と評価の計画

【表算2】は、「第4学年 東書下 7 わり算の筆算を考えよう」における単元の目標から単位時間の指導と評価の計画を示したものです。

【表算2】1単元の指導と評価の計画表

算数科 4年生 指導と評価の計画表（7 わり算の筆算を考えよう）〔15時間〕					
単元名	単元・題材・ユニット等の学習指導と評価計画				
	単元の目標	単元の学習内容	目標	単元評価規準	単位の学習の総括
わり算の筆算を考えよう	<p>単元・目標</p> <p>筆算形式による2、3位数を2位数でわる除法計算の仕方について理解し、それを適切に用いる能力を伸ばす。</p> <p>関心・意欲・態度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・除法が2位数の除法計算の仕方について理解し、それを適切に用いる能力を伸ばす。 <p>数学的な考え方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見振りもりをもとに、仮商の立て方や修正の仕方について考えようとしている。 <p>表現・処理</p> <ul style="list-style-type: none"> ・除法が2位数の除法計算を筆算で正確に行っている。 <p>知識・理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・除法が2位数の除法計算の仕方を理解している。 				
	<p>第1時目標</p> <p>何十でわる計算（あまりなし）の仕方を理解し、その計算ができる。</p>	<p>学習内容・活動</p> <p>色紙が60まいあります。この色紙を1人に20まいずつ分けると、何人に分けられますか。</p>	<p>目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・整数の除法の計算がたし算に比べて楽に計算できること。 	<p>単元評価規準</p> <ul style="list-style-type: none"> ・整数の除法の計算がたし算に比べて楽に計算できること。 	<p>学習活動における具体的な評価規準・判断基準</p> <p>関心・意欲・態度</p> <p>数学的な考え方</p> <p>表現・処理</p> <p>知識・理解</p> <p>評価結果に応じた指導</p>
	<p>第7時目標</p> <p>除法の切り捨て、切り上げの両方による仮商の正の仕方を比較し、自分の考えやすい、除法の処理の仕方を考える。</p>	<p>学習内容・活動</p> <p>87÷25の筆算の仕方を考える。</p>	<p>目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・整数の除法の計算がたし算に比べて楽に計算できること。 	<p>単元評価規準</p> <ul style="list-style-type: none"> ・整数の除法の計算がたし算に比べて楽に計算できること。 	<p>学習活動における具体的な評価規準・判断基準</p> <p>関心・意欲・態度</p> <p>数学的な考え方</p> <p>表現・処理</p> <p>知識・理解</p> <p>評価結果に応じた指導</p>
<p>単元の学習の総括</p> <p>関心・意欲・態度</p> <p>数学的な考え方</p> <p>表現・処理</p> <p>知識・理解</p> <p>評価結果に応じた指導</p>					

注： は判断基準に達しなかった児童、 は判断基準に達した児童への指導を示す

(3) 授業実践の概要(「関心・意欲・態度」「数学的な考え方」の観点を把握し指導に生かす実践)

【資料算1】は、「第4学年 東書下 7 わり算の筆算を考えよう」の第7時の授業実践の概要です。

【資料算1】「関心・意欲・態度」「数学的な考え方」の観点別学習状況を把握した指導に生かす授業実践の概要

目標 除数の切り捨て、切り上げの両方による仮商修正の仕方を比較し、自分が考えやすい除数の処理の仕方を考える。(7/15時間)

段階	学習活動	具体的評価規準及び判断基準・評価方法・手だて	授業場面での指導と評価の実際
導入	1 問題の提示 $87 \div 25$ を計算しよう	<p>「数学的な考え方」</p> <p>《具体的評価規準》</p> <p>過小商と過大商のそれぞれの過小修正の仕方を比べている。</p> <p>《判断基準・(評価方法)》</p> <p>$87 \div 25$の計算を除数の25をどのような数に表せば速く計算できるかを自分なりの考えでまとめることができる。(ノート発言)</p> <p>除数の25を被除数との比較から、20または、30と決めた理由が書いていれば「A」とする。</p> <p>《評価結果に応じた指導》</p> <p>除数を概数で表せない児童に対しては、教師からおおよその数で表す方法を教える。</p> <p>商を速く見つける自分なりの方法を、友達に説明できるように指示する。</p> <p>注： は判断基準に達しなかった児童、 は、判断基準に達した児童への指導を示す。</p>	<p>自分で考えた仮商と、その仮商の立てた理由をノートに書きましょう。</p> <p>ノートへの記入例</p> <p>Aと把握した児童の例 $25 + 25 = 50$ $50 + 25 = 75$とやって87に近いと思ったから。 頭の中で4にすると、100になって引けないと思ったから3にした。 87だから、25をたしていくと答えがでてくる。 $25 + 25 + 25$ これ以上たせないとだから3</p> <p>Bと把握した児童の例 最初に87を80にして、25を20にする。そして、$80 \div 20 = 4$だから商の所に4を立てる。 25をしたわけ、87を90と考えると$9 \div 2$をして4をたててやった。 3にしたわけ、87を90と考えると、わる数の25を30と考える。$90 \div 30 = 3$と見極める。</p> <p>評価結果 ・評価結果は、「A」19人「B」9人「C」2人(未記入)であった。 ・比較・検討の段階で、被除数との関係で仮商を求めたと発言した児童も「A」とした。</p> <p>評価結果に応じた指導 本時の学習課題を解決する際には、仮商修正の仕方を理解できない児童が3名いた。そのうち「C」と判断された児童は、仮商修正の仕方について「C」と判断された児童は、仮商修正の仕方について、友達の考えを聞き、よりよい除数の表し方を考える。</p>
	2 商の予想 ・仮商 2、3、4		
	3 課題の設定 仮商を立てやすい除数の表し方について学習しよう		
展開	4 課題の解決 除数をどのように表せば、仮商が立てやすいか考える		<p>今日の勉強で、仮商の立て方で気付いたことをノートに書きましょう。</p> <p>ノートへの記入例</p> <p>Aと把握した児童の例 * 商を4にする人も2にする人もいて、初めから3と分かっている人もいて、びっくりしました。 ・4にしても3にしても2にしても計算の答えは同じ。計算はちがうけど答えは同じということが分かった。 ・さんの発表はとてよかったです。25は20と考えてもいいし30と考えてもいいと思った。90 \div 30 = 3だから。</p> <p>Bと把握した児童の例 ・25は、20とも考え30とも考えられることがわかった。 ・25は、30と20の中心だからどっちにするかまよったけど、みんなの答えを聞いてよくわかりました。25は、5だからはんぶんだから、30にしても20にしてもいいということがわかった。</p> <p>評価結果 ・評価結果は「A」10人 「B」18人 「C」2人(未記入)であった。</p> <p>評価結果に応じた指導 ここでの指導は、教師が児童の書いた学習感想に対して返事を書く形で指導に生かした。 *さんへ さんのわられる数との関係からわる数の見極めを決めたことはとってもすばらしかったですね。いろいろ考えた発表があり、学習が楽しくなりますね。 さんへ 友達の発表を聞くとき気がつかないことが分かるね。</p>
	5 比較・検討 ・友達のことを、自分の考えと比較しながら聞き、よりよい除数の表し方を考える		
	6 一般化 ・自分の考えをまとめる		
終末	7 適用・発展 ・適用・発展問題を解く		
	8 本時の学習の振り返り 仮商の立て方で気付いたことをノートにまとめる ・自己評価カードに記入する	<p>「関心・意欲・態度」</p> <p>《具体的評価規準》</p> <p>仮商を立てやすい除数の処理の仕方を考えようとしている</p> <p>《判断基準・(評価方法)》</p> <p>$87 \div 25$の計算で、除数の25を20又は、30のどちらに見積もると仮商が立てやすいかを考えることをとおして算数のおもしろさに気付く。具体的には、除数をどちらで考えても商が同じになることに気付く。(学習感想 発言)</p> <p>素早く計算できる仮商の立て方やどの仮商を立てても、最終的には商が一緒になることを書いていれば「A」とする。</p>	
	9 次時の予告 ・被除数の桁数が大きい場合の計算の仕方について学習することを知らせる		

(4) 実践結果の分析・考察

ア 「数学的な考え方」「表現・処理」「知識・理解」の観点の目標の実現状況

本単元の評価問題は、「表現・処理」「知識・理解」については、市販テストを使用し、「数学的な考え方」については、市販テストと自作テストの二つを使用します。

単元テストによる目標の実現状況は、【表算3】のとおりです。

【表算3】評価問題による目標の実現状況

	数学的な考え方	表現・処理	知識・理解
到達率	81.2%	82.6%	88.6%

「表現・処理」と「知識・理解」の観点の力については、市販テストの「期待達成率」とほぼ同じであり、目標を実現したものと考えます。また、「数学的な考え方」の観点についても、市販テストの「期待達成率」とほぼ同じであることから、目標を実現したものと考えます。

イ 「関心・意欲・態度」の観点の目標の実現状況

「関心・意欲・態度」の観点は、指導と評価の計画により、第3時、第7時、第9時、第10時、第13時、第15時に評価した。各々の時間に評価した結果は、【表算4】のとおりです。

【表算4】「関心・意欲・態度」の時間ごとの評価の結果

	「A」	「B」	「C」	欠席等
第3時	4	25	1	0
第7時	10	18	2	0
第9時	13	15	2	0
第10時	14	10	5	1
第13時	11	17	0	2
第15時	10	19	0	1

注1：Nは児童数を表す

注2：表中の数字は人数を示す

この【表算4】より、「努力を要すると判断できる状況」の児童がだんだん減ってきていることがわかります。

全児童に「おおむね満足できると判断できる状況」を実現させるということから考えると、望ましい傾向にあると考えられます。

(5) 授業者の「指導と評価の計画」に関する意識

「指導と評価の計画」を用いた授業において、授業者の意識として記述されたことは、評価の観点が明確に示されているので評価が過重にならず使いやすかったこと、判断基準が明確であるので授業者も児童も評価しやすかったこと、評価結果に応じた指導が明確に示されていたので使いやすかったことです。しかし、学習感想として、解決をしているときの気持ちを振り返って書くことは、何を書いているのかがわかりにくく、児童には難しかったのではないかと記述されています。

授業者から見た児童の変容として記述されたことは、1単元をとおして、単位時間の指導計画に、評価規準、判断基準、評価の方法を位置付けて授業を行うことにより、具体的な判断基準が児童に提示されるので、児童は、今よりも上を目指そうという気持ちになり意欲的に学習に取り組むようになってきたこと、特に、考える時間を多く確保したことは、上位の児童には「考える楽しみ、発見する喜び」を感じさせることができ、意欲化につながってきたこと、自己評価を続けることで自己評価意識が高まり、自分なりのめあてをもって学習に取り組む姿が見られるようになってきたことです。学習内容の定着の度合いについて記述されたことは、「おおむね満足できる」状況に達していた児童は、単元テストでも定着の度合いが高かったため、小ステップで評価を続けることが定着の度合いを高めることにつながるということです。しかし、算数を苦手としている児童にとっては考える時間が確保されたとしても論理的に考えを進めることができず、「数学的な考え方」の観点の力を伸ばすことは難しかったと記述されています。

「指導と評価の計画」を使っただけの感想として記述されたことは、評価の観点が明確であったので評価が過重にならず使いやすかったこと、判断基準が明確であったので授業者も児童も評価しやすかったこと、評価結果に応じた指導が明確にされていたので使いやすかったということです。しかし、児童の意欲付けにつながるものの、授業者にとっては学習ノートを回収してコメントを記入することは、時間的に大変であると記述されています。

(6) 研究のまとめと今後の課題

ア 研究の成果

- (ア) 指導と評価の計画表を作成することにより、「B」の学習状況を把握することができ、その評価結果に応じた指導を計画的に行うことができました。このことにより、児童の習得状況を高めることに有効でした。
- (イ) 「関心・意欲・態度」の観点を評価することは難しいが、本研究で取り組んだ学習感想による評価の方法は、特に上位の児童には有効でした。
- (ウ) 四つの観点を評価するためには、学習時間にその観点を力に把握するための活動を指導過程に位置付け、意識して授業を進めることが大切となり、学習指導の改善に役立ちました。
- (エ) 児童の実現すべき目標を具体的に示した自己評価カードを使うことは、児童自らが自分自身の学習の状況を振り返る能力を高めることに有効でした。

イ 今後の課題

- (ア) 学習時間における評価は、指導に生かすものでなければなりません。評価項目が多くなると「評価のための評価」に陥る可能性があります。また、評価情報が多くなればなるほどそれをまとめて総括することや学習感想に返事を書くことは、教師の事務量を増やすことにつながるため、それらを少しでも解消するような評価方法や評価用具を開発する必要があります。
- (イ) 「関心・意欲・態度」の観点は、学習感想によってある程度は把握できます。文章を書くことを苦手としていたり表現力に乏しかったりする児童には、それだけで把握することは一面的でもあります。今後、「関心・意欲・態度」の観点の評価方法をさらに開発していく必要があります。

【主な参考文献】

- 新算数教育研究会編集、「関心・意欲・態度 数学的な考え方の指導と評価は、どうすれば成功するか」、東洋館出版社、1996年
- 北尾倫彦編集、「新しい評価観と学習評価」、図書文化社、1996年
- 教育改革研究会、「中学校絶対評価の手引き」、明治図書、2002年
- 北尾倫彦・鈴木淋編集、「観点別学習状況の新評価基準表」、図書文化社、2002年
- 日本教育評価研究会、「指導と評価」、図書文化社、2002年

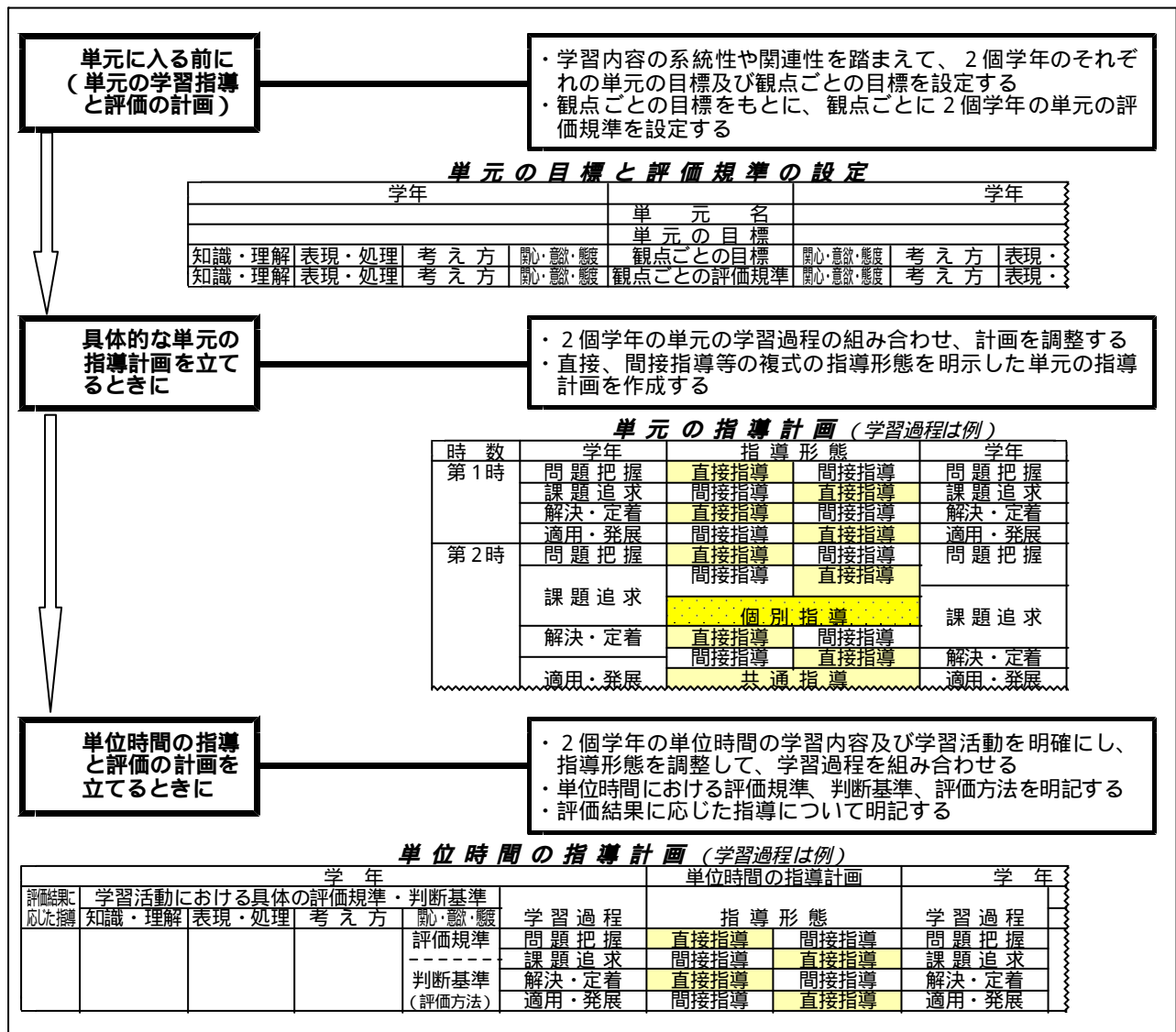
4 複式学級算数科の概要

(1) 複式学級算数科の指導と評価の計画

複式学級における学習指導では、2個学年の児童を同時に指導するため、指導内容や指導形態について組み合わせを考慮したり、工夫したりする必要があります。算数科においては、学年の目標及び内容が各学年ごとに明記されていますので、「学年別指導」「類似内容指導」等の中の指導類型を選択しても、複式学級算数科の目標及び評価規準は2個学年それぞれ設定することになります。

また、複式学級算数科の学習指導では、必然的に直接・間接指導が生じます。直接指導で教師が一方の学年を指導している間、もう一方の学年の児童は、個人または集団で学習活動を進めなければなりません。そのため、教師が2個学年の児童一人一人の学習状況を把握し、適切な指導援助をすることが困難な場合があります。しかし、このような状況を改善し、児童の目標の実現状況を的確に把握するためには、直接指導以外の場においても、学習状況を把握できるような時間帯を設定することが必要です。また、一方の学年に重点をおいて学習過程を組み合わせる場合も必要です。

【図複1】は、複式学級算数科における目標の設定から評価規準の設定及び2個学年の単元の指導計画、単位時間の指導計画までのおおまかな流れを示したものです。



【図複1】複式学級算数科における目標、評価規準の設定、単元、単位時間の指導計画作成の流れ

(2) 複式学級算数科の1単元の指導と評価の計画

【表複1】は、授業実践を行った第4学年「はしたの大きさの表し方を考えよう」及び第5学年「小数のかけ算を考えよう」の1単元の指導と評価の計画表です。

【表複1】複式学級算数科 1単元の指導と評価の計画表（一部抜粋）

複式学級算数科 第4・5学年 1単元の指導と評価の計画表									
4 学年 単元名					5 学年 単元名				
6 はしたの大きさの表し方を考えよう [小教] 10時間 東書下 p.2-11					4 小数のかけ算を考えよう [小教] 9時間 東書上 p.66-76 注:「4 小数のかけ算とわり算を考えよう」の小単元「小数のかけ算」を一つの単元として扱うこととする。				
単元の目標					単元の目標				
単元の学習内容					単元の学習内容				
単元の学習目標					単元の学習目標				
単元の学習見込み					単元の学習見込み				
<p>小数の意味や表し方について理解するとともに、小数の加法及び減法の意味について理解し、それらの計算の仕方を考え、適切に用いることができるようにする。</p> <p>数量や図形についての知識・理解 数量や図形についての表現・処理 数学的な考え方 算数への関心・意欲・態度</p> <p>1 端数部分の大きさを表すのに小数を用いること。 2 10の位の1について知ること。 3 小数が整数と同じ仕組みで表されていることを知るとともに、数の相対的大きさについての理解を深めること。 4 小数第1位(10の位)までの端数部分の大きさを表すことができること。 〔用語〕 小数、小数点、整数、小数第1位、和、差</p>					<p>小数のかけ算(110の位まで)の乗法の意味について理解し、その計算の仕方考え、適切に用いることができるようにする。また、計算法則は数範囲が小数の場合でも成り立つことを理解する。</p> <p>算数への関心・意欲・態度 数学的な考え方 数量や図形についての知識・理解 数量や図形についての表現・処理</p> <p>乗数が小数の場合でも、既習の整数の計算と同じように計算の仕方考え、適切に用いることができるようにする。 乗数が小数の場合でも、既習の整数の計算と同じように計算の仕方考え、適切に用いることができるようにする。 乗数が小数の場合でも、既習の整数の計算と同じように計算の仕方考え、適切に用いることができるようにする。</p>				
<p>1 ますの図と対応させながら、0.1がいくつ分かを確かめる。 2 1.2や0.40のような数を小数0.1、2.3のような数を整数として確認しながら、個別に指導する。任意の量を表す作業をさせ、理解を深めるようにする。</p> <p>1 ますの図と対応させながら、0.1がいくつ分かを確かめる。 2 1.2や0.40のような数を小数0.1、2.3のような数を整数として確認しながら、個別に指導する。任意の量を表す作業をさせ、理解を深めるようにする。</p>					<p>1 ますの図と対応させながら、0.1がいくつ分かを確かめる。 2 1.2や0.40のような数を小数0.1、2.3のような数を整数として確認しながら、個別に指導する。任意の量を表す作業をさせ、理解を深めるようにする。</p> <p>1 ますの図と対応させながら、0.1がいくつ分かを確かめる。 2 1.2や0.40のような数を小数0.1、2.3のような数を整数として確認しながら、個別に指導する。任意の量を表す作業をさせ、理解を深めるようにする。</p>				
<p>1 ますの図と対応させながら、0.1がいくつ分かを確かめる。 2 1.2や0.40のような数を小数0.1、2.3のような数を整数として確認しながら、個別に指導する。任意の量を表す作業をさせ、理解を深めるようにする。</p> <p>1 ますの図と対応させながら、0.1がいくつ分かを確かめる。 2 1.2や0.40のような数を小数0.1、2.3のような数を整数として確認しながら、個別に指導する。任意の量を表す作業をさせ、理解を深めるようにする。</p>					<p>1 ますの図と対応させながら、0.1がいくつ分かを確かめる。 2 1.2や0.40のような数を小数0.1、2.3のような数を整数として確認しながら、個別に指導する。任意の量を表す作業をさせ、理解を深めるようにする。</p> <p>1 ますの図と対応させながら、0.1がいくつ分かを確かめる。 2 1.2や0.40のような数を小数0.1、2.3のような数を整数として確認しながら、個別に指導する。任意の量を表す作業をさせ、理解を深めるようにする。</p>				
<p>1 ますの図と対応させながら、0.1がいくつ分かを確かめる。 2 1.2や0.40のような数を小数0.1、2.3のような数を整数として確認しながら、個別に指導する。任意の量を表す作業をさせ、理解を深めるようにする。</p> <p>1 ますの図と対応させながら、0.1がいくつ分かを確かめる。 2 1.2や0.40のような数を小数0.1、2.3のような数を整数として確認しながら、個別に指導する。任意の量を表す作業をさせ、理解を深めるようにする。</p>					<p>1 ますの図と対応させながら、0.1がいくつ分かを確かめる。 2 1.2や0.40のような数を小数0.1、2.3のような数を整数として確認しながら、個別に指導する。任意の量を表す作業をさせ、理解を深めるようにする。</p> <p>1 ますの図と対応させながら、0.1がいくつ分かを確かめる。 2 1.2や0.40のような数を小数0.1、2.3のような数を整数として確認しながら、個別に指導する。任意の量を表す作業をさせ、理解を深めるようにする。</p>				

(注)「評価結果に応じた指導」の欄において、印は判断基準(おおむね満足できる状況)に達していない児童、印は判断基準に達した児童への指導を示す。

(3) 授業実践の概要

研究協力校の複式学級第4・5学年(4年3名、5年3名、計6名)で、指導と評価の計画に基づいて、担任教師が授業を行いました。次頁【資料複1】は、第7時の授業場面での指導と評価の実際の概要を示したものです。

【資料複1】授業実践の概要（第7時）

本時の目標
1/10の位までの小数の加法の筆算の仕方を理解し、その計算ができる。

本時の目標
小数の場合でも、交換、結合、分配法則が成り立つことを理解する。

4 学 年	5 学 年	
<p>授業場面での指導と評価の実践</p> <p>問題・課題把握</p> <p>「では、2.5+1.9を自分の解決の仕方考えよう。」</p> <p>両学年の個別指導の時間帯で、4年生の学習状況をノートに記述をとおして把握しながら、個別指導をした。</p> <p>各児童への個別指導の概略</p> <ul style="list-style-type: none"> c児への個別指導 <p>「何が14なの。説明できるように書いてね」と助言したら、「0.1が」といって、(中略)別な方法でも取り組んでいたのだから、「すごいね」と言葉をかけ称揚した。</p> <p>図でも考えたんだね。すごいね。</p> <p>ますの図にかいて考えました。</p> <p>機関指導でノートの記述の状況を把握し、称賛の言葉をかけている様子</p> <ul style="list-style-type: none"> b児への個別指導 <p>「どうして、4.4になったかを説明できるようにしてくださいね」と助言した。</p> <p>2.5+1.9は25+19にして、2.5は0.1を25あつめた数で、1.9は0.1を19あつめた数です。答え4.4です。</p> <p>b児のノートの記述の抜粋</p> <ul style="list-style-type: none"> a児への個別指導 <p>T: これはどう考えたの。 a児: 25+19と考えると44としました。 T: どういうふうにして4.4になったのか教えて。 a児: 今までのたし算と同じように...(略)</p> <p>小黒版にまとめる時間がなかったため、児童の発表を教師がまとめる形で板書した。</p> <p>評価結果 「A」... c児 「B」... a児、b児</p> <p>解決の見通し</p> <p>解決する</p> <p>まとめ</p> <p>教科書p92の筆算のしかたを言葉でノートに書かせ、確認してから練習問題(教科書p9問)に入った。</p> <p>個別指導で児童のノートの記述から学習状況を把握し、ノートにまる付けをした。</p> <p>① 2.3 + 3.8 = 6.1 ② 1.7 + 4.3 = 6.0 ③ 2.6 + 3.4 = 6.0</p> <p>c児のノートの記述の抜粋</p> <p>学習状況及び評価結果 3人とも練習問題は全問正解で、個々に類似の計算問題に取り組んでいた。児童自身が答え合わせを進めていた。類似の計算問題6問はb児、c児は全問正解、a児は2問間違があったが、すぐに自力で直すことができた。</p> <p>評価結果 全員「B」</p> <p>通用・習熟</p> <p>ふりかえる</p> <p>a児はプリントまで、最後までたし算は楽しかった。</p> <p>b児はひき算をやった。ひき算の方が早かった。</p> <p>c児はひき算は少し苦手なところがあった。ひき算の仕方をもう少し練習したい。</p>	<p>授業場面での指導と評価の実践</p> <p>問題・課題把握</p> <p>水が、大きいポットには2.5ℓ、小さいポットには1.9ℓ入ります。水をあわせて何ℓ入りますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 分かってること 求めること 立式 2.5+1.9 <p>2 学習課題を立てる</p> <p>小数のたし算のしかたを考えよう。</p> <p>学習課題の確認をする。</p> <p>3 課題解決の見通し</p> <p>課題解決の方向性をもつ</p> <ul style="list-style-type: none"> 0.1をもとにして考える 位ごとに分けて考える 解決方法について考える 計算で考える 図で考える <p>4 課題を解決する</p> <p>自力解決をする</p> <ul style="list-style-type: none"> 2.5+1.9の計算の仕方を考える ア 0.1をもとにする。2.5、1.9は0.1をもとにする。25、19。25+19=44。0.1が44で4.4。 イ 位ごとに考える。2.5は2と0.5、1.9は1と0.9、2と1で3、0.5と0.9で0.1が14だから1.4。合わせて4.4。 ウ 筆算で考える <p>児童の発表を黒板に教師が簡潔に記述する形でまとめる</p> <p>解決した結果について話し合う</p> <ul style="list-style-type: none"> 0.1をもとにして考えると、整数の計算と同じようにできそう。 筆算でもできそう。 <p>5 まとめ</p> <p>筆算による計算方法を知る。</p> <p>6 練習問題を解く</p> <p>教科書p92の筆算の仕方を確認する。</p> <p>教科書p9問を解決する。</p> <p>練習プリント</p> <p>算数ドリル12</p> <p>7 学習をふりかえる</p> <p>本時の学習感想</p> <p>たし算は、ひき算より少し早かった。ひき算は、たし算より少し遅かった。ひき算の仕方をもう少し練習したい。</p>	<p>授業場面での指導と評価の実践</p> <p>問題・課題把握</p> <p>5年生の直接指導から入った。問題を提示し、簡単に交換、結合、分配の計算法則について復習した。</p> <p>「小数のときも成り立つと思いますか。どのようにして調べればよいですか。」</p> <p>発問への反応</p> <p>d児: 成り立つと思います。の数を決めて、計算すればいいと思います。</p> <p>e児: 私もd児さんと同じです。小数を当てはめて計算してみようと思います。</p> <p>f児: ほくも二人と同じです。小数を入れて、計算してみようと思います。</p> <p>「指定した小数を入れて、計算の決まりが成り立つか調べてみましょう。終わったら、自分で小数を決めて成り立つかも調べてみましょう。」</p> <p>学習状況及び個別指導の概要</p> <p>4年生の直接指導を終わらせた後、両学年の個別指導の時間帯に学習状況を把握した。3人とも計算はおおむねできていたが、交換、結合、分配の計算法則に基づいた工夫した計算ではなかったため、個別に指導した。</p> <p>この計算は、計算のきまりのどれに当てはまるかな。かける順番をかえればよさそうじゃない。</p> <p>f児へ個別指導をしている様子</p> <p>計算のきまりの(2)を使っているね。ちょっとミスがあるから、ここをやり直してみよう。</p> <p>d児へ個別指導をしている様子</p> <p>評価結果 e児、f児は計算のきまりを使って工夫して計算するまでには達していないと判断して「C」、d児は計算の工夫が見られたので「B」とした。</p> <p>まとめ</p> <p>適用・習熟</p> <p>ふりかえる</p> <p>e児は工夫すれば2回かかってもいいことがわかった。</p> <p>d児くんが28.08を100倍、0.9を10倍にして、1000倍にして計算し、1/1000になおして計算することが分かってうれしかった。</p>
<p>学習活動</p> <p>1 問題を把握する</p> <p>水が、大きいポットには2.5ℓ、小さいポットには1.9ℓ入ります。水をあわせて何ℓ入りますか。</p> <p>2 学習課題を立てる</p> <p>小数のたし算のしかたを考えよう。</p> <p>3 課題解決の見通し</p> <p>課題解決の方向性をもつ</p> <ul style="list-style-type: none"> 0.1をもとにして考える 位ごとに分けて考える 解決方法について考える 計算で考える 図で考える <p>4 課題を解決する</p> <p>自力解決をする</p> <ul style="list-style-type: none"> 2.5+1.9の計算の仕方を考える ア 0.1をもとにする。2.5、1.9は0.1をもとにする。25、19。25+19=44。0.1が44で4.4。 イ 位ごとに考える。2.5は2と0.5、1.9は1と0.9、2と1で3、0.5と0.9で0.1が14だから1.4。合わせて4.4。 ウ 筆算で考える <p>児童の発表を黒板に教師が簡潔に記述する形でまとめる</p> <p>解決した結果について話し合う</p> <ul style="list-style-type: none"> 0.1をもとにして考えると、整数の計算と同じようにできそう。 筆算でもできそう。 <p>5 まとめ</p> <p>筆算による計算方法を知る。</p> <p>6 練習問題を解く</p> <p>教科書p92の筆算の仕方を確認する。</p> <p>教科書p9問を解決する。</p> <p>練習プリント</p> <p>算数ドリル12</p> <p>7 学習をふりかえる</p> <p>本時の学習感想</p> <p>たし算は、ひき算より少し早かった。ひき算は、たし算より少し遅かった。ひき算の仕方をもう少し練習したい。</p>	<p>学習活動</p> <p>1 問題・課題を把握する</p> <p>整数のときに成り立った計算のきまりは、小数のときも成り立つか調べよう。</p> <p>(1) $(x) \times = x$ (2) $(x) \times = x \times (x)$ (3) $(x) \times = x + x$</p> <p>2 課題解決の見通し</p> <p>課題解決の方向性をもつ</p> <ul style="list-style-type: none"> 整数のときに成り立つこと予想 計算のきまりが成り立つか予想 解決方法について話し合う どのようにして調べるか考える。 <p>3 課題を解決する</p> <p>自力解決をする</p> <ul style="list-style-type: none"> 整数のときに成り立つこと予想 計算のきまりが成り立つか予想 解決方法について話し合う どのようにして調べるか考える。 <p>4 課題を解決する</p> <p>自力解決をする</p> <ul style="list-style-type: none"> 整数のときに成り立つこと予想 計算のきまりが成り立つか予想 解決方法について話し合う どのようにして調べるか考える。 <p>5 まとめ</p> <p>整数のときに成り立った計算のきまりは、小数のときも成り立ちます。</p> <p>6 練習問題を解く</p> <p>教科書p74問を解く。</p> <p>7 学習をふりかえる</p> <p>本時の学習感想</p> <p>d児は自分で問題を作ってやることができて、2.08×0.9で1000倍したことで、1/1000にすることが分かりました。</p>	<p>授業場面での指導と評価の実践</p> <p>問題・課題把握</p> <p>5年生の直接指導から入った。問題を提示し、簡単に交換、結合、分配の計算法則について復習した。</p> <p>「小数のときも成り立つと思いますか。どのようにして調べればよいですか。」</p> <p>発問への反応</p> <p>d児: 成り立つと思います。の数を決めて、計算すればいいと思います。</p> <p>e児: 私もd児さんと同じです。小数を当てはめて計算してみようと思います。</p> <p>f児: ほくも二人と同じです。小数を入れて、計算してみようと思います。</p> <p>「指定した小数を入れて、計算の決まりが成り立つか調べてみましょう。終わったら、自分で小数を決めて成り立つかも調べてみましょう。」</p> <p>学習状況及び個別指導の概要</p> <p>4年生の直接指導を終わらせた後、両学年の個別指導の時間帯に学習状況を把握した。3人とも計算はおおむねできていたが、交換、結合、分配の計算法則に基づいた工夫した計算ではなかったため、個別に指導した。</p> <p>この計算は、計算のきまりのどれに当てはまるかな。かける順番をかえればよさそうじゃない。</p> <p>f児へ個別指導をしている様子</p> <p>計算のきまりの(2)を使っているね。ちょっとミスがあるから、ここをやり直してみよう。</p> <p>d児へ個別指導をしている様子</p> <p>評価結果 e児、f児は計算のきまりを使って工夫して計算するまでには達していないと判断して「C」、d児は計算の工夫が見られたので「B」とした。</p> <p>まとめ</p> <p>適用・習熟</p> <p>ふりかえる</p> <p>e児は工夫すれば2回かかってもいいことがわかった。</p> <p>d児くんが28.08を100倍、0.9を10倍にして、1000倍にして計算し、1/1000になおして計算することが分かってうれしかった。</p>

(4) 評価情報一覧表と単元の目標の実現状況

評価結果を記録し、次への指導に生かすために【資料複2】に示す評価情報一覧表を使用しました。個人ごとに評価情報を累積していき、単元の総括においても使用するものです。

【資料複2】評価情報一覧表

4年「小数」評価情報一覧表（C児のみ掲載）												
氏名	はしたの大きさの表し方			小数のしくみ			小数のたし算とひき算			まとめ		単元の総括
	第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時	第8時	第9時	第10時	単元テスト	
C児	関心・意欲・態度	A B C	A B C	A B C			A B C	A B C	A B C	A B C	学習感想	A
	数学的な考え方				A B C	A B C	A B C			A B C	全11問中 (11)問正解	A
	表現・処理		A C	B C	B C		B C	B C	B C	A B C	全10問中 (10)問正解	A
	知識・理解		B C		B C	B C				B C	A B C	全10問中 (10)問正解
所見	10等分に分けて調べることができた。	定義を理解し、すべてに整数、小数に分けられた。他の例も考えられるなど理解が深い。	かさの字面を生かして、長さの場合でもすぐに理解することができた。	理由付けで2.4を2.5から0.1小さい数と言うことができた。	【欠席】	図を使って説明していた。整数と同じように考えている。	位ごとに計算している。整数+小数の整数を「0」とみて説明することができた。	整数・小数でA児の発言で間違いに気が付いた。それ以降の計算は確実である。	スピード、正確性ともによし。自分で計算問題を考へ、計算を進めることができた。	授業中進んで発言したり、家庭で小数表示のあるものをたくさん見つけたりと、積極的に学習を進めることができた。いろいろな場面での気付きを他の二人にも知らせているような場面をつくり、さらに意欲を高めていき		

(注) 1 ABCは、「A：十分満足できると判断されるもの B：おおむね満足できると判断されるもの C：努力を要すると判断されるもの」を示す。
 2 「表現・処理」「知識・理解」の観点においては、単元テストの時間以外は、Bに達しているか、いないかを判断する。
 3 その時間の評価は、ABC(BC)の記号を で囲む。
 4 所見欄には、子どものよいところや成長が見られた場面、つまずきにどのような支援を行い、効果はどうだったか等について簡単に記述する。
 5 単元の総括欄には、各単位時間の観点別学習状況の総括の仕方に基づき、ABCの総括結果を記入する。

(5) 授業者の授業に対する意識

指導と評価の計画をもとにして行った授業に関する授業者の意識調査の回答内容は、【表複2】に示すとおりです。

【表複2】授業者の授業に対する意識調査の回答内容

<p>設問1 1単元をとおして、単位時間の指導計画に、評価規準、判断基準、評価の方法を位置付けて授業を行っていただきましたが、このことにより、従来の授業と変わったと思われた点はありませんでしたか。</p>	<p>(3) 学習内容の定着の度合いについて 前述のように意識は高まり集中力もあったと思うが、それが定着には生かされていなかったようである。 4年生の場合は定着がよかったと言える。</p>
<p>(1) 授業の進め方について 単位時間の評価が明確になり、より評価の意識が高くなったように思う。</p> <p>(2) 授業における評価の見取り方について 判断基準は児童の達成状況を見取ることができるものでしたか。 「表現・処理」「知識・理解」についてはおおむねよいと思う。 「関心・意欲・態度」「数学的な考え方」となると、達成状況を見取る一つのものにはなるが、単位時間のものとなると難しいところもある。 関心・意欲・態度の項は、児童の「目に見えにくい学力」を見取することに役立ちましたか。 複式指導の場合、特に評価しにくい部分であり、今回の実践のなかでも確実ということは言えなかった。</p>	<p>設問3 指導と評価の計画表を用いた授業を行って、使いやすと感じたのはどのような点でしたが、また、改善した方がよいと感じたのはどのような点でしたが。</p> <p>(1) 使いやすいと感じた点() ・両学年の指導と評価の計画が並記されているので、見やすかった。 ・領域毎に系統性を考えながら指導にあたることができた。 ・単元毎の指導と評価の計画表は、実際に指導する場合、一冊で済むので便利であった。 ・また、指導形態、評価規準、判断基準がポイントを絞って書かれており、授業を行った場合に評価のポイントが明らかになってやりやすかった。</p> <p>(2) 改善した方がよいと感じた点() ・教科全体の指導と評価の計画表は、網羅的に目標を並記するのではなく、ポイントあるいは系統性がより明らかになるような簡潔な記述の方がより見やすいと思う。 ・単元の方では、全時間、指導の流れが課題提示、自力解決、まとめ、習熟のパターンになっているが、複式指導の研究だからこそ、1単元を見通して、指導内容による学年の軽重やすらしがあってもよかったと思う。 ・単位時間の指導案の中には「関心・意欲・態度」「数学的な考え方」の「A」の判断基準もあるので、単元の指導と評価の計画表の中に入れてもいいと思った。</p>
<p>設問2 1単元をとおして、単位時間の指導計画に、評価規準、判断基準、評価の方法を位置付けて授業を行っていただきましたが、この単元の学習をとおして、子どもたちが変わったと思われた点はありませんでしたか。</p>	<p>設問4 今回の授業実践にかかわり、どのようなことでも結構ですので、お気づきになった点を下欄にご記入ください。</p>
<p>(1) 学習に対する意欲について 評価方法を位置付けたことによる子どもたちの変化は特にはなかったように思う。 ただ、単位時間内に学習したことを身に付けなければいけないという気持ちは、今までより高くなったと思われる。そう考えると、評価という意識が子どもたちにも働いたということかもしれない。</p> <p>(2) 学習時間の取り組みの様子について (1)でも記述したように、単位時間で学習を身に付けなければいけないということにより集中して学習することができた。</p>	<p>今回は評価がポイントであったが、評価したことを単位時間のなかで生かすのはやはり難しかった。特に、複式(わたり)のなかで、個別指導に十分時間をとるためには、前段の指導を効率よく行わなければいけない。授業を流すので精一杯であった。 複式の場合、人数は少ないが単位時間の評価項目は2~4となる。間接指導では評価しにくいところもあるので難しいと思った。</p> <p>(注) 表中の はプラスの評価のもの、 は改善を要するものを表す。</p>

(6) 学習感想カードと児童の「学習感想カードへの返事」に対する意識

少人数であるという複式学級の特性を生かし、教師が一人一人の児童の単位時間及び単元の学習感想カードに返事を書くことで、児童が自らの学習状況に気付き、その後の学習の改善に役立てることができると考えます。【資料複3】は、学習感想カードの記載例を示したものです。

【資料複3】 学習感想カードの記載例（一部抜粋）

5年算数「小数のかけ算(2)」学習感想カード		名前	d児
1	927 (金)	今日の学習でわかったことや思ったことを書きましよう。リボンの長さが小数になっても、式にあらわせることが分かりました。	先生から 答えを予想するところはとてもよかったです。計算もよくできていましたね。
2	980 (月)	2.7を10倍して計算し、その積を110にすれば答えを求められることが分かりました。	2.7を0.1かいくつ集まった数と考えたところがとてもよかったです。そうすると、整数×整数で計算できますね。
3	101 (火)	小数×小数の筆算のしかたがわかりました。100倍したのに、110にしてしまったのが、ざんねんだなと思いました。	答えの予想と比べたら、すぐに気がつきましたね。積はかける数、かけられる数を倍した分だけ、わらなければいけないですね。
4	103 (木)	かけられる数が0.4などになっていたから、1100にするときに、0.92などになって0をつけなければいけないことが分かりました。	積の小数点の動かしかたはよく分かりましたね。1100になるので小数点をつけるときに0が必要になるのですね。
5	104 (金)	1より小さい数をかけると、積はかけられる数より小さくなるのが分かりました。今までの計算とのちがいを見つけることができてよかったです。	これが小数のかけ算(1より小さい数をかけるとき)の今までのちがいですね。よく気がつきました。
6	107 (月)	長方形の辺の長さが小数のときも、今までと同じようにできることがわかりました。平行四辺形や正方形も同じなのかなと思いました。	長方形の面積で使えるということは、平行四辺形や正方形でも使えるそうですね。まともうまく書くことができて良かったですね。

単元の学習感想カード 名前 _____ d児 _____

小数のかけ算(2)の学習をふりかえってみましょう。

【1】あなたにあてはまる記号を()に書きましよう。

とてもよかったです	できました	あまりできなかった
-----------	-------	-----------

進んで学習できましたか。()

いろいろなやり方でチャレンジできましたか。()

考え方のよいところをたくさん見つけられましたか。()

【2】「小数のかけ算(2)」を学習して思ったことや、さらに学習してみたいことなどを書きましよう。

- ・計算で計算ミスが多かったです。
- ・計算のきまりで、自分でも問題を作って計算することができました。
- ・筆算で、倍にすることや何分の一にすることがちがってもそれ以外は似ていると思いました。
- ・e児さんが、10倍したら110にするという考え方をしているのがいいなと思いました。
- ・これから、小数の正方形や平行四辺形の面積の求め方を考えたいと思いました。

先生から

自分の考えを説明したり、自分で問題を作って練習したりと、進んで学習することができました。長方形の面積の公式が小数でも使えるということは、正方形や平行四辺形の面積にも使えるそうですね。やってみてくださいね。

児童の「学習感想への返事」に対する意識調査の回答状況を示したものが【表複3】です。これから、すべての児童が、自分の学習状況を教師から「学習感想カードへの返事」で知らされることに対して、肯定的な意識をもっているといえます。

【表複3】 児童の「学習感想への返事」に対する意識調査の回答状況

設問 あなたは、先生から授業中のあなたの勉強の様子について「学習感想カードへの返事」で知らされたとき、どのような気持ちになりましたか。次のア～オから、自分にあてはまるものを選んでください。(いくつでもかまいません。) ア ほめられたことをこれからも続けていきたい イ 自分の足りなかったところにこれから力を入れていきたい ウ これからも勉強をがんばっていきたい エ とくに何も感じなかった オ いやだった カ その他	N = 6 (単位:人)						
	児童	4年生		5年生		選択肢ごとの	
	選択肢	a児	b児	c児	d児	e児	f児
	ア						4
	イ						6
	ウ						6
	エ						0
	オ						0
	カ						0

(注1) Nは児童数を示す。
(注2) 表中の は各児童が選択回答した選択肢を示す。

(7) 指導と評価の計画の改善点

授業実践及び授業者の授業に対する意識調査の結果から、今後検討を加えていかなければならない複式学級算数科の指導と評価の計画の改善の主な視点は次のとおりです。

- ・「算数への関心・意欲・態度」及び「数学的な考え方」の観点において、目標の実現状況を把握するための判断基準について吟味する必要があること
- ・1単位時間の学習活動における具体的評価規準を設定する数の検討が必要なこと
- ・学習過程及び指導形態をより柔軟な形で設定する必要があること
- ・「直接・間接・個別・共通」等の指導形態に応じた評価方法の検討が必要なこと

(8) 複式学級算数科の研究のまとめ

評価規準、評価方法や直接・間接・個別・共通の指導形態を位置付けた指導と評価の計画に基づいて授業を行うことは、複式学級算数科における「学力」を適切にとらえるうえで、有効であるという見通しをもつことができました。今後は、指導と評価の計画の改善の視点に照らし合わせながら、複式学級算数科の学習指導がさらに効果的に進められるようにしていきたいと考えています。

【主な参考文献】

全国へき地教育連盟、「21世紀を拓く教育シリーズ へき地・複式・小規模学校 Q & A」、2000年

5 音楽科の概要

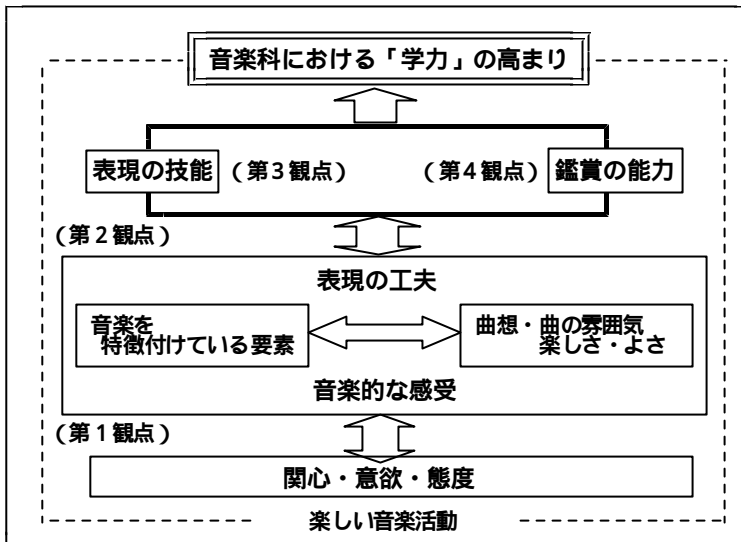
(1) 音楽科における児童生徒の資質や能力を高める指導と評価についての基本的な考え方

ア 音楽科における「学力」とは

音楽科における児童生徒に身に付けさせたい「学力」は、学習指導要領に示されている音楽科の目標そのものであり、具体的には、学習指導要領の内容「A表現」「B鑑賞」として示されています。

音楽科の目標の実現状況を把握するための視点として、学習指導要領では「音楽への関心・意欲・態度」「音楽的な感受や表現の工夫」「表現の技能」「鑑賞の能力」の四つの観点を設定しています。この四つの観点は、目標の実現状況を分析的に把握する評価の視点であると同時に、音楽科の「学力」を分析的にとらえる視点でもあります。

【図音1】は、四つの観点の関係を構造的に示したものです。四つの観点は、そ



れぞれが独立して機能するものではなく、【図音1】四つの観点からみる小学校音楽科の「学力」の構造相互にかかわり合いながら存在しています。そして、最終的には、児童生徒の目標の実現状況を総合的に把握していく際のよりどころになるものです。

上図からも分かるように、四つの観点のつながりを音楽科における「学力」という側面から考えたとき、第2観点がその核をなし、他の観点の土台的役割あるいは他の観点への橋渡しの役割を果たしています。したがって、この第2観点を授業にどう位置付けるかが、音楽科における「学力」を児童生徒に確実に身に付けさせるための重要な視点になると考えます。

イ 音楽科における「関心・意欲・態度」のとらえ

今回の学習指導要領においては、特に、「関心・意欲・態度」といった情意面を、どうとらえ、どう評価するかが重視されています。

「関心・意欲・態度」は、それだけが一人歩きするものではありません。そこには、必ず、児童生徒の心を揺り動かす学習の対象が存在します。音楽科の場合、これが楽曲です。ある楽曲に出会い、「あれ、何の楽器だろう」とか「きれいな曲だなあ」と、対象に向かって心が揺れます。その結果、「もう一度聴いてみたいなあ」とか「あんなふうに演奏してみたいなあ」と思いが広がり、活動に意欲をもちます。そして、例えば表現活動をとおして、「今度は他の曲も歌いたいなあ」とか「あの楽器も演奏したいなあ」というように、さらにより高次の価値を探究したり、それが好きとか嫌いとかという態度の表れに変化し高まったりしていきます。これが、「関心・意欲・態度」のとらえです。

したがって「関心・意欲・態度」の評価は、他の観点とのかかわりのなかで、目標に対する特徴的な姿を把握することが大切です。次頁【表音1】は、小学校第5学年題材名「日本の音楽の特徴を感じて」の学習における児童の「関心・意欲・態度」の高まった姿を具体的にとらえたものです。このように具体的な活動場面に合わせて児童の姿を明らかにしていくことにより、目には見えない「関心・意欲・態度」を具体的な力としてとらえていくことができると考えます。

【表音1】小学校音楽科における「関心・意欲・態度」の高まった具体的な姿の例

音楽科の指導過程	児童の思い	具体的な姿の例	かかわってくる力
楽曲との出会い 「子守歌」の学習をとおして、日本のふしの感じに興味をもつ。	・何という曲かな・聴いたことがあるな・優しい感じがする・日本的な感じだ	・曲全体の雰囲気をとらえて聴こうとしている・旋律を歌ったりして曲を味わって聴こうとしている	・音楽を進んで聴こうとする力・楽曲全体の気分を感じようとする力
思いを広げる 「日本の民謡」を、音楽を特徴付けている要素と結び付けて曲を味わう。	・楽しい曲だ・何の楽器だろう・太鼓のリズムがおもしろい・演奏したいな	・リズムや音色等に気を付けて聴こうとしている・演奏したいという思いをもっている	・楽曲を特徴付けている要素を感じ取る力・演奏をイメージする力
自己表現する 日本の音楽の旋律やリズムの特徴を生かして「私のお囃子」を表現する。	・私も歌ってみよう・あのリズムを取り入れよう・強弱を工夫してみよう	・意欲的に活動している・よりよい表現を工夫している・友達のを取り入れようとしている	・自分のイメージや思いを表現する力・よい表現を求めて工夫する力
思いを味わう 「お囃子」の発表会をとおして、互いのよさを学び合う。	・みんなも上手・強弱をつけるといい・弾む感じが祭りっぽい・他の祭囃子も聴きたい	・他の演奏の良いところを見つけている・表現する喜びを味わっている	・曲全体を味わう力・音楽を聴いてよさや美しさを味わう力

(2) 音楽科の指導と評価の計画

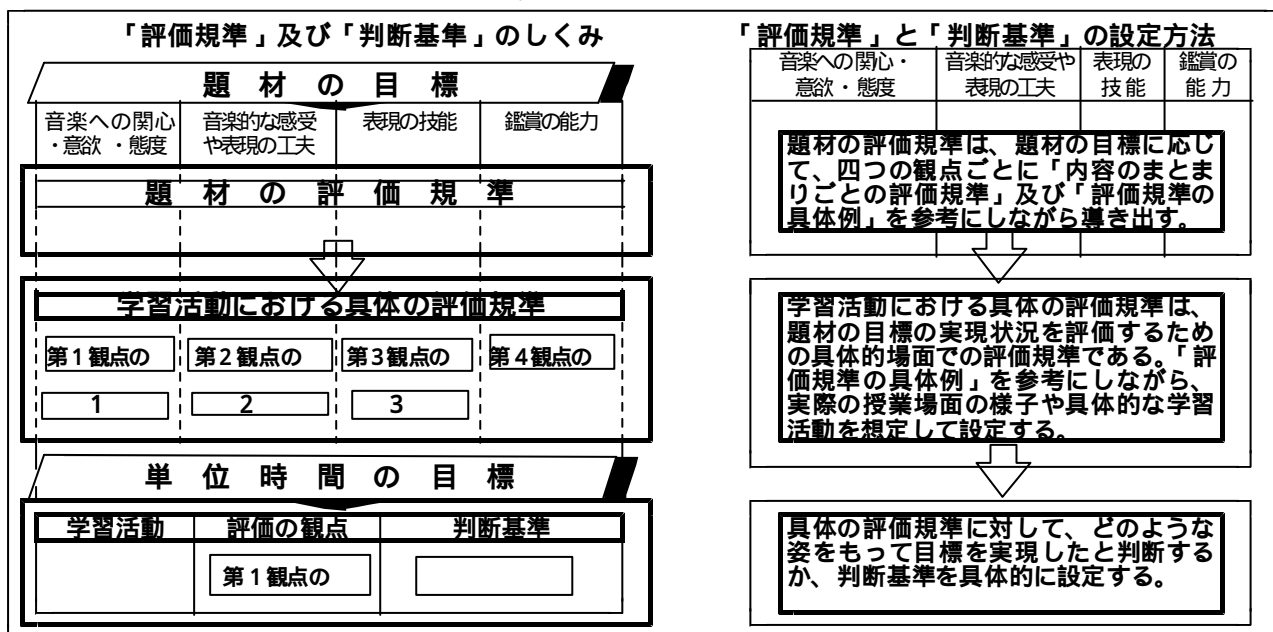
ア 題材の目標及び単位時間の目標の設定

題材とは、「いくつかのねらいをもった学習のまとめり」のことです。この「題材の目標」は、学習指導要領に示す目標や指導内容に基づいてより具体化し、明確に設定する必要があります。また、「題材の目標」を実現させるために、構造的に細分化し設定するのが「単位時間の目標」です。「題材の目標」と「単位時間の目標」を設定することが、各校において計画時に行う第1段階の作業です。

イ 評価規準の設定

目標の実現状況を適切にとらえるために、評価規準を設定します。これは児童生徒の姿、行動の形で具体化されることが大切です。音楽科においては、目標の実現状況を四つの観点から把握するため、評価規準も四つの観点に基づいて設定します。評価規準には「題材の評価規準」と「学習活動における具体的評価規準」があります。さらに、具体的評価規準に対して、どのような姿をもって目標を実現したと判断するか、その判断基準を具体的に設定します。これが各校において計画時に行う第2段階の作業です。

その設定方法を【図音2】に示します。



【図音2】題材の評価規準と具体的評価規準及び判断基準の設定方法

ウ 評価方法の設定

次に、設定した題材の評価規準や単位時間における判断基準にしたがって、具体的な学習活動における児童生徒の学びの状況やその変化、一人一人のよさや可能性を的確に把握できるよう、評価方法を吟味しなければなりません。評価方法は、把握したい児童生徒の「学力」により異なります。

【表音2】は、音楽科における評価方法と評価の観点及び評価時期との関係を示したものです。

【表音2】音楽科における評価方法と評価の観点及び評価の時期

鑑賞の能力	表現の技能			音楽的な感受 や表現の工夫	音楽への関心 ・意欲・態度	評価 の 観 点	評 価 の 時 期	診 断 的 評 価 事 前	形 成 的 評 価 事 中	総 括 的 評 価 事 後
	音楽を聴いて そのよさや美 しさを感じ取 る力	音楽をつくっ て表現できる 力	歌い方や楽器 の演奏の仕方 を自分で身に 付ける力	音楽を聴いた り楽譜を見た りして演奏す る力	曲想や音楽を 特徴付けてい る要素を感じ 取って、工夫 して表現する					
						観察法				
						ペーパーテスト				
						演奏発表 作品				
						学習シート				
						批評文感想文				
						発言内容				

教師は児童生徒の目標の実現状況を一側面からの把握にならないよう、個々の学習状況を多面的に総合的に把握するために、上記の評価方法を併用するなどの工夫も必要です。また、学習の結果としての姿だけでなく、そこに至るまでの内面の感受の状況も把握できるよう、適切に評価の時期を設定していくことが重要です。

こうして得た評価結果は、【表音3】に示したような補助簿に記録します。時間的に制約のある状況において、長く継続して使用可能な補助簿にするために、また教師にとって加重負担にならないようにするために、その様式や記入の方法を工夫していくことが望まれます。

【表音3】音楽科における補助簿の様式の一例

題材名		教材名			1	2	3
題材の目標	評価規準	観点	学習活動	判断基準			
	音楽への関心 ・意欲・態度 音楽的な感受 表現の工夫						
出席・欠席の状況							
忘れ物・提出物の状況							
その他特記事項							
音楽への関心・意欲・態度							
音楽的な感受や表現の工夫							
表現の技能							
鑑賞の能力							
学年末テスト							

エ 評価の総括

日々累積した評価結果は、総括の際の大事な資料になります。記録されたどの評価結果を総括の際の資料にするのか、あらかじめ教師間で共通理解を図っておく必要があります。

1 題材における児童生徒の目標の実現状況の様子は、個々に様々な推移をたどります。このようななかで、教師は、単位時間ごとの確かな評価結果の累積をもとに、題材の観点ごとの評価の総括を行います。総括の方法には、N時までの評価結果を平均化する方法、あるいは、ある特定の時間の評価結果を総括の材料としてみていくなど様々な方法が考えられます。題材の目標や内容に照らしながら、どのように総括するか、計画段階でその方法を明確にしておくことが重要です。

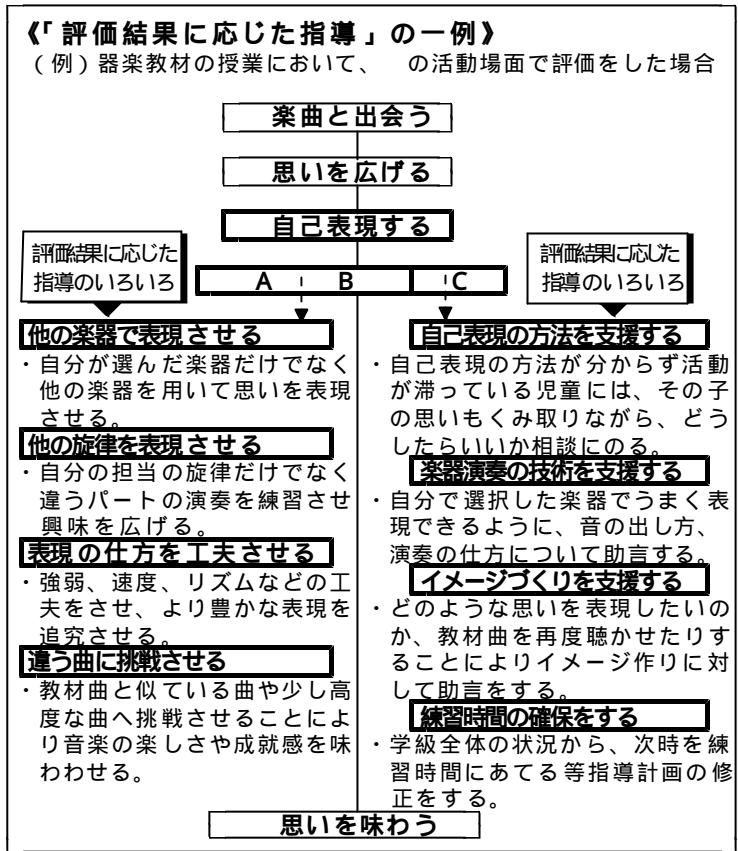
オ 評価結果に応じた指導

評価は、児童生徒にとって次の学習の改善に役立つものでなければなりません。これを教師側から考えると、「その結果を次の指導にどう生かすか」ということになります。

教師は、あらかじめ設定した判断基準に照らし、「C：努力を要する」と判断された児童生徒に対しては、「B：おおむね満足できる」状況を目指して指導を積み重ねることが必要です。また、「B：おおむね満足できる」や「A：十分満足できる」状況にあると判断された児童生徒に対しても、発展的な学習内容を指示することにより、さらにより状況へと高める指導も忘れてはなりません。これが、評価結果に応じた指導をするということです。【図音3】は、その一例です。

(3) 音楽科の1題材の指導と評価の計画

以上のことをもとに作成した指導と評価の計画表を【表音4】に示します。



【図音3】「評価結果に応じた指導」の具体例

【表音4】1題材の指導と評価の計画表 (一部抜粋)

指導と評価の計画表 中学校音楽科 第1学年 題材名「日本の伝統音楽」						
題材名	日本の伝統音楽	観点	音楽への関心・意欲・態度	音楽的な感受や表現の工夫	表現の技能	鑑賞の能力
【指導内容】 本題材は、学習指導要領の以下の内容に対応し、指導する。 「B鑑賞・ア、イ、エ」 ・「越天楽」を聴き、日本の伝統音楽に興味をもつこと ・「越天楽」に使用されている楽器の音色や響き、テンポやリズムを知覚し、日本の伝統音楽の特徴を感じ取ること ・雅楽の背景にある文化・歴史とかがわからせて聴くこと 【教材】主教材「雅楽「越天楽」」 関連教材「越天楽今様」	題材の学習内容	題材の目標	日本の伝統音楽に関心を持ち、意欲的に聴く。	日本の伝統音楽の特徴を感じ取る。	日本の伝統音楽の特徴を感じ取る。	日本の伝統音楽の特徴を意識しながら聴く。
	題材の評価規準	日本の伝統音楽の特徴及びその背景となる文化・歴史などに関心を持ち、意欲的に聴いている。	日本の伝統音楽の特徴を感じ取るとともに、楽曲を、その背景となる文化・歴史などがかわらせて感じ取っている。	日本の伝統音楽の特徴を感じ取るとともに、楽曲を、その背景となる文化・歴史などがかわらせて感じ取っている。	日本の伝統音楽の特徴を感じ取るとともに、楽曲を、その背景となる文化・歴史などがかわらせて感じ取っている。	日本の伝統音楽の特徴を意識しながら楽曲を聴き取るとともに、楽曲をその背景となる文化・歴史などがかわらせて聴き取っている。
学習活動における具体的評価規準	雅楽の楽器の音色や響き、テンポやリズムに関心を持ち、意欲的に聴いている。雅楽の背景となる文化・歴史とのかかわりに関心を持ち、意欲的に聴いている。	雅楽の楽器固有の音色や響き、テンポやリズムを知覚し、それが生み出す楽曲の雰囲気を感じ取っている。雅楽の背景となる文化・歴史とかがかわらせて、感じ取っている。	雅楽の楽器固有の音色や響き、テンポやリズムを知覚し、それが生み出す楽曲の雰囲気を感じ取っている。雅楽の背景となる文化・歴史とかがかわらせて、感じ取っている。	雅楽の楽器固有の音色や響き、テンポやリズムを知覚し、それが生み出す楽曲の雰囲気を感じ取っている。雅楽の背景となる文化・歴史とかがかわらせて、感じ取っている。	雅楽の楽器固有の音色や響き、テンポやリズムが生み出す楽曲の雰囲気を意識し、楽曲を聴き取っている。	
単位時間ごとの計画	目標	評価内容・評価方法・判断基準			評価結果に応じた指導	
第一時 主な学習活動	1 「越天楽」を聴き、全体的な感じをつかむ。	目標 「越天楽」を聴き、ゆっくりとしたテンポや拍節的なリズムを感じ取る。				
	2 学習課題をつかむ。	(観点1の) ○「越天楽」を聴き、全体的な曲の感じについて自分なりの感想をもっている。 (後)学習シートの記述 [全体的な曲の感じ、テンポやリズム、楽器の音色など、越天楽を聴いた感想を一つ以上書いている]			・言葉でうまく表現できない生徒には、擬態語等を使って記述してよいことを伝える。 ・感想の記述ができなかった生徒には、友達感想を聞き、鑑賞の視点をとらえさせる。	
	3 「越天楽」のリズムやテンポを感じ取る。	(観点2の) ○指揮や手拍子をしたり、「越天楽今様」の歌詞を口ずさんだりして、「越天楽」のテンポやリズムを感じ取っている。 (中)観察 [越天楽は、越天楽今様よりもさらにゆっくりなテンポであること、拍の刻みが一定ではないことを感じ取り、それを身体表現や歌で表現している]			・複数の方法を取り入れ、どの生徒にも、楽曲のテンポやリズムを感受させる。	
	4 「越天楽」を鑑賞する。					

(以下、省略)

(4) 音楽科の1単位時間の指導と評価の計画

前頁に示した1題材の指導と評価の計画に基づいて、1単位時間ごとの指導と評価の計画を作成します。【図音4】に第1時の計画を示します。

中学校音楽科 第1学年 題材名「日本の伝統音楽」(2時間扱い)		
1 本時の目標(第1時) 「越天楽」を聴き、ゆっくりとしたテンポや拍節的なリズムを感じ取る。		
2 本時の展開		
評価結果を生かした指導	学習活動	評価のポイント
<ul style="list-style-type: none"> 言葉で表現できない生徒には、擬態語などを使って記述してよいことを伝える。 挙手しなかった生徒の感受の様子を、以後、意識しながら授業を進める。 感想の記述ができなかった生徒には、他の生徒の発表を聞き、鑑賞の視点をとらえさせる。 	1 楽曲の全体的な感じをつかむ 「越天楽」を聴く 感想を書く 感想を発表する 2 学習課題をつかむ 3 楽曲のテンポやリズムを確認する 「越天楽今様」のテンポやリズムを確認する 「越天楽」のテンポやリズムを感じ取る 感想を発表する	○は評価内容はチェックポイント 楽曲との出会いの様子を把握する場面 (中)鑑賞中のつばやきや表情を観察 (中)学習シートへの記述の状況を挙手で把握 (観点1の) ○「越天楽」を聴き、全体的な曲の感じについて自分なりの感想をもっている。 (後)学習シートの記述 テンポやリズムの感受の様子を把握する場面 (中)「越天楽今様」に合わせて歌ったり指揮をしたりする活動中の様子を観察 (観点2の) ○指揮や手拍子をしたり、「越天楽今様」の歌詞を口ずさんだりして、「越天楽」のテンポやリズムを感じ取っている。 (中)観察 テンポやリズムの感受の深まりを把握する場面 (中)テンポやリズムを感じ取りながら「越天楽」に合わせて指揮する様子を観察 (観点4の) ○本時の学習を生かしながら、「越天楽」のテンポやリズムをもとにして批評文を書いている。 (後)批評文の内容
<ul style="list-style-type: none"> すべての生徒の目標実現に向けて、「越天楽」の学習の前段階として、「越天楽今様」のテンポやリズムを確認しておく。 「越天楽」に合わせて「越天楽今様」の歌詞を口ずさんだり、手拍子や指揮をしたりするなどの様々な活動を取り入れることにより、ゆっくりとしたテンポや拍節的なリズムをどの生徒にも感じ取らせる。 手拍子や指揮がしだいに合ってきたことに気付かせ、テンポやリズムの感受の深まりを実感させる。 導入時に感想を記述できなかった生徒がどのように変化したか、その鑑賞の様子を把握し、励ます。 批評文は、次時の学習の導入でも紹介し、前時の学習の想起に役立てる。 	4 楽曲を鑑賞する まとめの表現をする まとめの感想を書く 5 次時の学習内容を知る	

【図音4】1単位時間の指導と評価の計画

(5) 音楽科の研究のまとめ

研究の第2年次である本年度は、昨年度作成した児童生徒の資質や能力を高める指導と評価についての推進試案に基づき、音楽科におけるその基本的な考え方をまとめ、音楽科における指導と評価の計画を作成しました。そして、それに基づき授業実践を行いました。その結果、評価規準や判断基準を設定することは、育てたい児童生徒の姿が具体的にになり、指導の重点化が図られること、また、それにより評価の観点が明確化されることなどの成果が得られました。

今後は、「関心・意欲・態度」の評価の在り方や評価の総括の仕方についてさらに検討を加えていきたいと考えます。

【主な参考文献】

- 辰野千壽著、「新しい学力観に立った学習評価基本ハンドブック」、図書文化、1995年
- 宮野モモ子・丸山忠璋編、「小学校新しい音楽科教育」、教育出版、2001年
- 音楽鑑賞教育振興会編集、「音楽鑑賞教育」、財団法人音楽鑑賞教育振興会、8月号、2001年
- 音楽鑑賞教育振興会編集、「音楽鑑賞教育」、財団法人音楽鑑賞教育振興会、4月号、2002年

6 小学校家庭科の概要

(1) 小学校家庭科の指導と評価の計画

小学校家庭科の学習は、家庭生活に焦点をあてており、「実践的・体験的な活動を通して」学習が展開されます。そして、基礎・基本が確実に身に付いているかどうか、児童の学習状況を評価できるように示されているのが、観点別学習状況の評価の観点です。これは、「家庭生活への関心・意欲・態度」「生活を創意工夫する能力」「生活の技能」「家庭生活についての知識・理解」の四つの観点から小学校家庭科の力をとらえ、評価しようとするものです。

これらの4観点による評価規準は国立教育政策研究所の「参考資料(報告)」をもとにしながら題材や単位時間ごとに作成します。

小学校家庭科の場合、学習指導要領の示す内容(1)~(8)の大項目を「内容のまとめ」と設定しています。そして、設定した「内容のまとめ」ごとに、評価規準を作成しており、その解説の記述をもとに評価規準の具体例を作成しています。

また、評価方法については、児童の学習活動をできるだけ客観的に把握し、その後の活動を具体的に支援できるよう適切な方法を選択していかなければなりません。授業中の様子ばかりでなく、ノートや作品、テスト等事後の評価や家庭で実践したこと、家庭で調べたことへも対応できるような評価方法を工夫する必要があります。

ア 小学校家庭科における育てたい児童の姿を具体的にすること

小学校家庭科の目標を実現させるためには、評価する内容を明確にし、「題材の目標の実現状況を把握するための評価規準」と「単位時間(学習活動における具体)の評価規準」の二つを設定する必要があります。また、「単位時間(学習活動における具体)の評価規準」について、その目標の実現状況を判断するために判断基準を設定します。

評価規準は、題材や単位時間の目標に基づき、育てたい児童の姿を明確にし、何を評価するのか具体的に設定します。そして、すべての児童が少なくとも身に付けておかなければならない状況、つまり「おおむね満足できると判断される状況」とそれ以上の「十分に満足できると判断される状況」を含めて表現しています。

また、判断基準は、評価者や第三者からも客観的に目標の実現状況を判断できるように設定します。それは、「十分に満足できると判断される状況」Aとするかまたは、「おおむね満足できると判断される状況」Bなのか、あるいは「努力を要すると判断される状況」Cなのか目標の実現状況を示す尺度となります。

イ 適切な評価の方法や用具を用いて児童の目標の実現状況を的確に把握すること

(ア) 適切な評価の方法について

「学力」を観点別に評価するためには、それぞれの観点にあった評価方法を選択しなければなりません。それには、観点によって様々な方法の選択が考えられますが、本研究においては、それぞれの観点にあわせ、観察法や自己評価法、作品法、テスト法等それぞれの観点到応じた方法をとることにします。

(イ) 適切な評価の用具について

評価の用具とは、目標の実現状況を把握し判断するためのカードやチェックリストなどと考えています。本研究では、その用具として学習ノート・プリントと評価一覧表、座席表を使用します。

学習ノート・プリント

基本的には、学校で使用されているノートを活用します。その際、題材の構成や評価規準に相当する記入箇所を事前に確認しておき、必要に応じて補充プリントを準備しておく必要があります。

本研究では、事前調査や自己評価、感想記入、家庭からの感想等の欄について、研究協力校で使用している市販ノートで進めますが、題材構成上、授業者作成による補充プリントも使用します。

評価一覧表

評価一覧表は、児童の学習活動を授業後に記入するものです。下の【表家1】のように、観点別に設定された評価規準について、A～Cを記入します。

【表家1】評価一覧表（題材名 「まかせてね きょうの食事」）

	関心・意欲・態度					創意工夫する能力					生活の技能				知識・
	食 事 調 べ	食 事 調 べ	実 習 の 態 度	家 庭 料 理	総 括	作 り 方	献 立	実 践 の 計 画	家 庭 で の 実 践	総 括	米 の 観 察	み そ の 観 察	調 理 実 習	総 括	組 み 合 わ せ
	9/4	9/9	9/27	10/8		9/25	9/30	10/1	10/8		9/9	9/11	9/26		9/4
児童1	A	C	A	B	B	A	A	C	C	B	A	A	A	A	B
児童2	A	C	A	B	B	B	B	C	C	B	C	C	A	B	B
児童3	A	B	A	B	B	B	A	B	C	B	B	A	A	A	A
児童4	A	C	A	A	A	A	B	C	C	B	B	A	A	A	A
児童5	A	A	A	B	A	A	A	A	A	A	B	A	A	A	A

座席表

児童の学習状況を記入する場合、ノートやプリントに記入された記録や作品としてその結果が文字や形に残るものは評価情報として累積はしやすいものです。しかし、授業者から見た姿やそのときの発表・発言の状況等は個別指導を行う際に、とても大切な要素ではありますが、記録として残すことが難しいものも多くあります。

強烈な印象を与えるような場面は別として、児童のさりげないつぶやきや困惑した表情、別な場面で生かせる発言など、一人一人の学習状況をできるだけ詳しく記録として残し、次の指導に生かす評価の工夫も必要となります。

本研究では、単位時間ごとの座席表を作成し、その単位時間内の判断基準と照らし合わせたときの活動状況を授業中にも記録することにより、それを評価一覧表の補助簿として使用します。

座席表は、次頁の【表家2】のように、児童名の下に評価規準に対応した判断基準や授業者からみた児童の学習状況を簡単にメモできるように準備します。

理論や説明の時間が多くなる授業と実習や作業など児童の活動場面が中心となる授業では、評価規準だけでなく、その指導形態や方法も異なります。個別の実験や実習などの学習活動時間は、評価や個別指導のチャンスではありますが、その方法やタイミングについては、常にその状況に応じた評価の工夫を心がけておかなければなりません。

【表家2】座席表（評価補助簿）

	児童3		児童4		児童15	児童16		児童27
	児童1		児童2		児童13	児童14		児童25
(教卓)								
	評価規準			判断基準				
	みそ汁の作り方について調べ、まとめることができる。			みそ汁の作り方について教科書や資料で調べ、ノートにまとめることができる。(観察)				
	みそ汁の作り方について理解している。			具の取り合わせ、みその量、入れるタイミングがわかる。(テスト)				

(ウ) 題材の総括について

題材の「学習活動における具体の評価規準」に基づいて、「十分に満足できると判断される状況」はAとし、同様に「おおむね満足できると判断される状況」はB、「努力を要すると判断される状況」はCとしました。そして、A～Cを数値化した評価の合計点から総括する考え方で進めました。

その際、目標や題材のねらい、学習活動の時間に応じて評価に重み付けをする場合があり、各観点で大切にしておきたい要素を明確にしました。

「家庭生活への関心・意欲・態度」の観点

この観点は、基本的にすべての授業に含まれているものでありますが、特に具体的な状況を判断できる場面として設定します。

本研究の題材では、家庭における食事調べや実習の態度、家庭での実践に関することに重点を置いて、評価規準を設定し、特に家庭での実践に重み付けを行います。

「生活を創意工夫する能力」の観点

この観点における能力は、基礎的な知識や技能を身に付けたうえで高められていくと考えられるので、題材のまとめや実習計画の場面で評価規準を設定します。ただし、実習中の工夫や創造的な発想にも対応できるように評価方法や重み付けの工夫が必要です。

「生活の技能」の観点

米飯とみそ汁作りの基本的な技能を活動中の様子や学習プリント、自己評価、作品を中心に評価したものを総括します。

「家庭生活についての知識・理解」の観点

米やみその特徴、献立の条件、炊飯やみそ汁の作り方についての知識を学習ノート、プリント、題材テストを中心に評価したものを総括します。総合的な知識や考え方が含まれている題材テストの結果には、重み付けを行いながら総括します。

ウ 児童の自己実現に結び付く評価をすること

実習や作業場面での評価や学習ノートやプリント、小テストの結果に対するコメントなどが、児童の学習意欲を引き出し目標の実現へと結び付くと考えます。

また、家庭生活での実践に結び付くように、保護者や家庭との情報交流や協力依頼も児童の実践意欲を喚起する大きな要因となるので、配慮や工夫が必要です。

(2) 指導と評価の計画

教科の目標、内容をもとに題材を構成しますが、題材の目標や内容に基づきながら観点別の評価規準として具体的に設定する様式が、【表家3-1】です。

【表家3-1】1題材の指導と評価の計画

単元・題材・ユニット等の学習指導と評価計画							
題材名	題材の目標		関心・意欲・態度	創意工夫	生活の技能	知識・理解	
	題材の学習内容						
	目標	評価規準					
単位時間ごとの計画			評価規準・判断基準				
			関心・意欲・態度	創意工夫	生活の技能	知識・理解	評価結果に応じた指導
第1時	目標						
	学習内容・活動						
第2時	目標						
題材の学習の総括							
	観点ごとの総括		関心・意欲・態度	創意工夫	生活の技能	知識・理解	評価結果に応じた指導

表中の には題材の学習内容を記入します。そして、 には題材の目標をもとに観点別の目標を記入します。その下 に評価規準が記入されるわけですが、この評価規準は題材の観点ごとの総括の時に規準となるものです。なお、その評価規準は、「おおむね満足できると判断される状況」以上を示しています。

同様に には、単位時間ごとの評価規準と判断基準を設定します。1単位時間に評価可能な数は、1～2観点程度と考えられますので、題材の構成から適切に設定します。その際、 へ「努力を要すると判断される状況」の児童への指導について記入しておくことが必要です。また、「おおむね満足できると判断される状況」以上の児童への指導についても記入しておきます。 には、観点ごとの総括の方法や重み付けの内容について記入します。

1題材の指導と評価の計画の記入例を示したのが、【表家3-2】です。

【表家3-2】1題材の指導と評価の計画（第6、7時）

単位時間ごとの計画		評価規準・判断基準				評価結果に応じた指導	
		関心・意欲・態度	創意工夫	生活の技能	知識・理解		
第6、7時	目標	ごはんのみそ汁を作ることができる。盛りつけ、配膳、正しい食べ方ができる。	安全に気をつけて、米飯のみそ汁の調理に進んで取り組んでいる。		調理計画にそって手順よく実習できる。		手順カードや配膳カードを示しながら、自分の担当を再確認させる。後かたづけ、ゴミ処理の方法について考えさせる。
	学習内容・活動	ご飯を作る。みそ汁を作る。盛りつけ、配膳をする。試食をする。後始末、反省をする。	火の扱い、用具の使い方に気をつけ、計画通りに進んで調理している。(観察)		調理計画にそって手順よくごはんのみそ汁を作ることができる。(観察、記録用紙)		(注)表中の は「努力を要すると判断される状況」の児童への指導であり、は「おおむね満足できると判断される状況」以上の児童への指導である。

(3) 授業実践と結果の分析

授業における目標の実現状況は、各観点ともにおおむね良好の結果を得ました。特に、「生活の技能」の観点では、体験的な学習活動を多く取り入れたり、視覚的な教材・教具を工夫していたことが、児童の技能を向上させる大きな要因となりました。

また、食事調べや家庭での実践という授業以外の活動場面が必要であったため、学級における男女

間の実態や家庭で取り組む姿勢の違いが他の観点における目標の実現状況の結果や題材テストの結果にも影響したと考えました。

(4) 授業者の手だてに関する意識

授業者の授業実践に対する意識として、「判断基準が具体的に示されていたことで、毎時間のねらいがはっきりわかり、ねらいに迫るための具体的な方法やそのための事前準備をしっかりと考えることができた」と記述されていました。

一方、評価を強く意識するあまり、授業の流れをその方向へ導こうとして「評価のための授業」にならないよう留意していたという記述もありました。どのような授業でも児童の思考過程や興味・関心を抱くような指導方法を心がけることが大切なことといえます。

目標を実現するために、「発表させること」をその指導方法のなかに位置付けたところ、以前よりも発言を意識する児童が増え、学習への取り組みもよくなり、理解が深まったという成果もありました。

また、指導と評価の計画のなかで、「努力を要すると判断される状況」と「おおむね満足できると判断される状況」以上の児童への手だてが準備されていたことで、実態に応じた指導をスムーズにし、指導方法の改善につながったことは、特に大きな成果でした。

(5) 児童の手だてに関する意識

事後のアンケート結果から、児童はおおむねプラス傾向の意識をもっていました。

今回は、第6、7時の実習後の感想と家庭での実践後の感想を児童に記述させ、教師からも個々にコメントを記入して返したことが、次の実践への大きな意欲付けとなりました。学校での実習をもう一度家庭で実践した児童や、材料や切り方を工夫して実践した児童など様々でありましたが、日常生活での実践は、それ自体が生きた教材であり、さらに家族からのコメントをもらうことにより、学校での学習に対して関心・意欲を高め、実践的な態度の育成につながっていくと思われれます。

(6) 研究のまとめ

ア 成果

- (ア) 具体的な児童の姿を描いて授業に臨んだため、指導が焦点化され、指導法や教材・教具の整備に見通しをもつことができ、効率よく評価できるようになりました。
- (イ) 評価結果に応じた指導を準備しておいたため、「努力を要すると判断されるもの」へ補足的な指導をしたり、「おおむね満足できると判断されるもの」以上の児童へも応用・発展的な指導をしたりするなど個に応じた指導が図られました。
- (ウ) 発表や発言、児童の活動場面を多く取り入れた結果、学習集団（班や学級）が積極的に授業へ参加するようになり、学習に対する姿勢に改善が認められました。

イ 課題

- (ア) 実践結果に基づき、計画表をさらに使いやすく改善していくこと
- (イ) 学級の実態、生活習慣など学習集団の環境の違いに対応できる評価方法を検討すること

【主な参考文献】

- 橋本 都 編著、「小学校学習指導要領の展開家庭科編」、明治図書、1999年
- 水野香代子・吉泉幸枝編著、「多様な指導法で学び方を創る小学校家庭科」、明治図書、2001年
- 小島 宏・寺崎千秋 編、「小学校第6学年の絶対評価規準」、明治図書、2001年

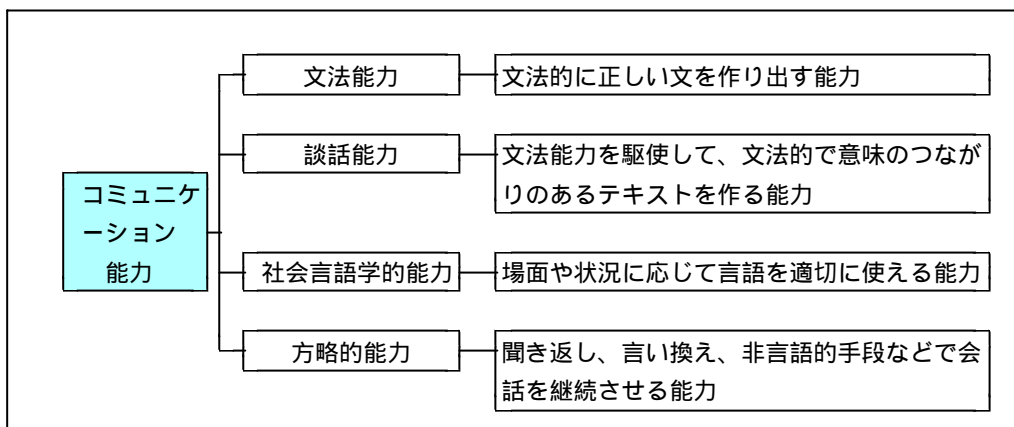
7 英語科の概要

(1) 英語科における生徒の資質や能力を高める指導と評価についての基本的な考え方

ア 英語科における「学力」とは

英語科における「学力」をどのようにとらえるかについては、時代の要請や英語学の学説によって変遷してきました。近年では、社会言語学や応用言語学の立場から、言語運用能力を重視する方向に転換してきています。平成4年の学習指導要領改正の際にはじめて「コミュニケーション能力」の育成が目標として掲げられ、平成14年（高等学校は平成15年）の改正による生きる力の育成を英語科の目標として具現化したものが、「実践的コミュニケーション能力」の育成ととらえることができます。

コミュニケーション能力の定義として今日最も一般的な考えは、【図英1】に示したものです。これを受けて、中学校や高等学校で育成することが求められている能力



は、言語材料等の知【図英1】CanaleとSwainのコミュニケーション能力

識を生かして、実際に英語を運用することができる能力です。これは、学習指導要領においては「言語活動」「言語の使用場面」「言語の働き」として構成されています。

イ 英語科における評価規準と評価方法の開発のとらえ方

指導要領の目標に照らして、実現状況を把握するために評価規準を設定します。英語科においては、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「表現の能力」「理解の能力」「言語や文化についての知識・理解」の四つの観点で、目標の実現状況を分析的にとらえていきます。国立教育政策研究所の「参考資料（報告）」では、次頁【図英2】に示したように、「関心・意欲・態度」の観点については、「言語活動への取り組み」と「コミュニケーションの継続」というように、四つの観点についてそれぞれ二つずつ具体的な考え方を示しています。

評価規準を設定する際は、「理解の能力」を「読むこと」で評価するというように、どの観点とどの技能領域で評価するのかを明確にしておかなければなりません。そして、目標が実現されているかどうかを判断するための判断基準を設定します。判断基準は、学習活動において想定される生徒の具体的な状況例で示すことが必要です。

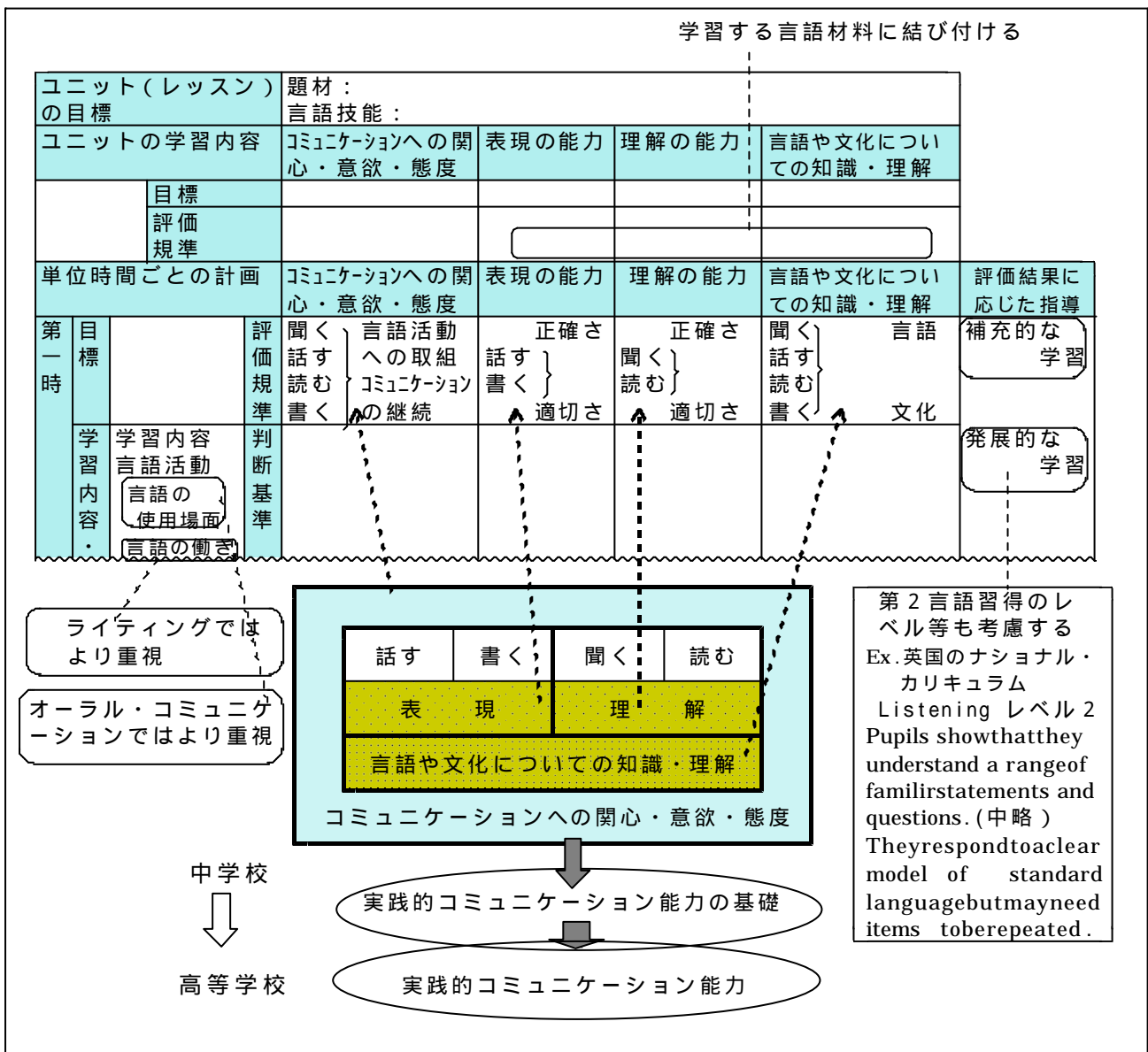
中学校において、「目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）」に切り替わることによって、新たな評価方法の開発が早急に求められているということではありません。重要なことは、これまでの観点別評価の実績を踏まえて、四つの領域に特定化した評価方法を整理し、さらに評価の妥当性・信頼性・実用性を高めていくことです。妥当な評価とは、例えば、「表現の能力」を「話すこと」の領域で把握する際に、書かせて評価するのではなく、「話すこと」は実際に話させて評価することを意味します。また、特に「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」について、これまでは英語科の学習に対するものととらえて、ノートやワークシートの提出状況や学習全般に対する取り組み状況を

把握して評価を行ってきた実態もありました。しかし、この観点は、学習活動のなかのコミュニケーション活動が行われている場面で生徒の取り組み状況を評価しなければなりません。したがって、指導目標に沿ってコミュニケーション活動を位置付け、その活動への積極性やどのような工夫をしながらコミュニケーションを行おうとしているかによって、目標の実現状況を把握する必要があります。

(2) 英語科の指導と評価の計画

ア 英語科における目標の設定の仕方

英語科の学習は、教科書や教材をどのように用い、どのようなことに重点をおいて指導を展開するかということに結び付いています。したがって、四つの技能を支える言語や文化の理解については、教材配列に即して目標を設定してよいと考えます。また「表現の能力」については、身に付いた言語材料を用いて総合的に積み重ねられていくことから、単位時間で設定するよりもむしろ学期や学年等の長いスパンで、「ALT に挨拶ができ、自分の体調について説明ができる」や「クラスメートの前で、将来の夢について発表することができる」等のように設定することが重要です。



【図英2】英語科における「学力」と指導と評価の計画のとらえ方

「参考資料」では、他の教科にならって単元の評価に関する事例が示されています。しかし、英語科は積み重ねの教科であり、「学力」はスパイラル状に発達していくものですから、「単元」という考え方はなじまないと考えます。そこで、英語科では「単元」を、評価を蓄積していきそれをまとめる単位としてとらえ、指導と評価の計画を作成するにあっては、使用する教材のユニットやレッスンにしたがって言語材料の配列をしていくことが適切と考えます。

これまで述べてきたことをまとめたものが、前頁の【図英2】です。

イ 適切な評価の方法及び用具のとりえ方

【表英1】は、本研究で用いた評価方法です。

【表英1】評価の方法

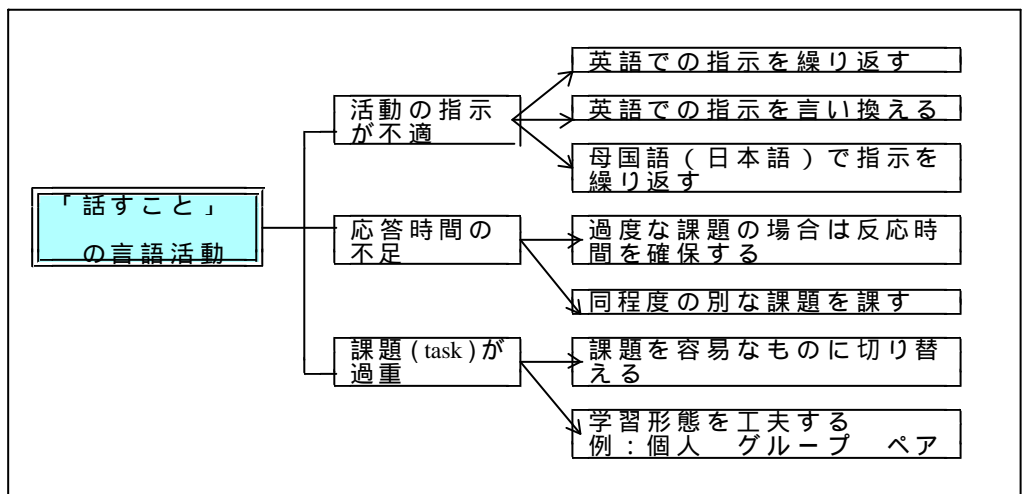
評価方法	いつ・どんな場面で			だれが		何を					
	授業前 診断	授業中 形成	授業後 総括	教師	生徒	コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	理解の能力		表現の能力		言語や文化についての知識・理解
							聞く	読む	話す	書く	
リスニングテスト											
ペーパーテスト											
観察法											
自己評価、相互評価											
ワークシート											
ノート											
パフォーマンス											

観察で「理解の能力」や「知識・理解」を的確にとらえることは困難なので、観察法は「関心・意欲・態度」を把握する場合のみ用いることとします。また、評価の用具とは、目標の実現状況を客観的に把握するものです。本研究では、ワークシート、ノート、自己評価シート、相互評価シート、テストを用います。

ウ 生徒の自己実現に結び付く評価のとりえ方

評価は、生徒が目標の実現に向けてどのように変容しているかを明らかにし、その後の指導に生かすべきものですから、すべての生徒がおおむね満足できる状況になるように努力しなければなりません。

そのために、あらかじめ評価結果に応じた指導の手だてを計画しておく必要があります。「話すこと」における補充指導への生かし方を例として示したものが、【図英3】です。



生徒一人一人が 【図英3】「話すこと」における補充指導への生かし方例

「おおむね満足できると判断される状況」になるように、評価結果を生かし指導を行うことは、基礎・基本を定着させるというねらいに沿うものです。またそれと同時に、英語科における「学力」は連

続的に発達する「熟達度の連続体」(松沢2002)であるという特性をもつことから、第2言語の発達段階を想定した ELP の Self-Assessment Grid や英国の National Curriculum 等を参考にして、発展的な指導の手だてに生かすことが必要です。33頁【図英2】に、発展的な学習として英国の National Curriculum の例を示しました。

(3) 中学校英語科の指導と評価の計画に基づく授業実践と実践結果の分析・考察

ア 授業実践の概要

英語科の指導と評価の計画(本資料では省略)に基づいて、授業実践を行いました。実践の対象は石鳥谷町立石鳥谷中学校第3学年1学級です。【資料英1】は授業実践の概要です。

【資料英1】評価結果を個別指導に生かした授業実践の概要

<p>前時の目標：・「疑問詞 + to 不定詞」の形・意味を理解し、それを用いて英文を書く。(2 / 6 時間) ・「It is + 形容詞 + for ~ to ~」の文型の用法・意味を理解する。 学習活動：ペアワークにより、英文を正しい発音や音調で音読する。 言語の働き：質問する、答える、提案する。単位：人 評価結果</p> <table border="1"> <tr> <td>コミュニケーションへの関心・意欲・態度</td> <td>A</td> <td>B</td> <td>C</td> <td>合計</td> </tr> <tr> <td></td> <td>2</td> <td>31</td> <td>3</td> <td>36</td> </tr> </table> <p>「努力を要する」と判断された生徒が3人という状況</p>					コミュニケーションへの関心・意欲・態度	A	B	C	合計		2	31	3	36	
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	A	B	C	合計											
	2	31	3	36											
<p>本時の目標：「It is + 形容詞 + for ~ to ~」の文型を用いてペアで対話できる。(3 / 6 時間) 言語活動：本文の対話文をもとにペアで音読練習をする。言語の働き：質問する、答える、提案する</p> <table border="1"> <tr> <th rowspan="2">学習活動</th> <th rowspan="2">指導上の留意点</th> <th colspan="2">評価の観点及び領域</th> <th rowspan="2">具体的評価規準 判断基準</th> </tr> <tr> <th>関</th> <th>表</th> </tr> </table>					学習活動	指導上の留意点	評価の観点及び領域		具体的評価規準 判断基準	関	表				
学習活動	指導上の留意点	評価の観点及び領域		具体的評価規準 判断基準											
		関	表												
<p>《復習8分》 1 評価結果を知る</p> <p>前時のワークシートを個々に返却し</p>															
<p>《導入15分》 1 教師との問答をとおして新出文の意味を推測する</p> <p>既習事項を含む英文を利用して、「It is + 形容詞 + for ~ to ~」の意味を推測させる</p> <p>Ss: Yes, I did. (No, I didn't.) Ss: ... Ss: It is interesting for me to watch movies.</p> <p>T: Did you see Star Wars (Harry Potter)? T: Is it interesting for you? T: Then you say, it is interesting for me to watch movies.</p>															
<p>2 「It is + 形容詞 + for ~ to ~」を含む文の音声練習を行う</p> <p>「It is + 形容詞 + for ~」を固定し、to ~ 以下の入れ替えで生徒の身近な内容で練習できるようにする 全員 個人 全員</p>															
<p>《展開22分》 1 新出語句の発音練習を行う 2 本文の dialog を CD で聞く 3 聞き取った大切な部分をワークシートに記入する 4 音読する (1) model reading (2) choral reading (3) buzz reading (4) pair reading</p> <p>FCを用いて、mim-mem を行わせる 新出語句の意味や用法を説明する 大切なポイントを日本語で与え、背景知識を活性化させる 週末に何をしたいか、結局何をすることになりそうか、エレンは戸惑ったけれどもなぜ賛成したのか 語の個々の発音やアクセントの他、文の音調やリズムに注意して音読させる 心情を表すように音読させる ペアワークで音読練習をさせる</p> <p>自然な音調の会話を聞いて、大切な部分を理解することができる(ワークシートの記述により授業後に評価) 自然な音調の会話を聞いて、聞き取った内容をワークシートに日本語で記入している ペアワークを協力して行っている(観察) 読んだり繰り返したりしようとする</p>															
<p>ペアワークの最中に、前時に指導を要すると判断された3人の生徒に対し個別指導を行う。 S1: 活動の仕方が十分理解できなかったことによる ↑ ペアワークの方法を支援 S 2 & S 3 : 表現の技術が十分でなかったことによる ↑ 教師のあとについて、音読練習を行ってからペアワークに取り組ませる。</p> <p>評価結果</p> <table border="1"> <tr> <td>コミュニケーションへの関心・意欲・態度</td> <td>A</td> <td>B</td> <td>C</td> <td>合計</td> </tr> <tr> <td></td> <td>1</td> <td>7</td> <td>19</td> <td>0</td> <td>36</td> </tr> </table>					コミュニケーションへの関心・意欲・態度	A	B	C	合計		1	7	19	0	36
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	A	B	C	合計											
	1	7	19	0	36										
<p>【注】1 Sは話すこと、Rは読むことを表す。 2 使用教科書は、New Horizon 3 English Course (東京書籍)である。</p>															

イ 授業実践から明らかになったこと及び課題

生徒の目標の実現状況について【資料英2】プログレス・レポートの例

は、本資料では省略します。

【資料英2】は、評価結果を個々の生徒に知らせるために本研究で用いた方法の一部です。また、授業実践により明らかになったことと課題の主なものをまとめたものが、【表英2】です。

No.() Name ()		評価項目	達成度
September 11	FindSomeoneWhoに積極的に取り組む	StartingOut のリスニング問題が理解できる	
		ボブが知らなかったのは何か、英語で書くことができる	
September 17	Dialog を読んで概要が理解できる	ペアリーディングに積極的に取り組む	
September 18	ペアリーディングに積極的に取り組む	Reading for Communication を読んで概要が理解できる	
September 19	ペアリーディングに積極的に取り組む	相手に聞こえる声で、適切に区切って読むことができる	
その他のコメント	英語を読んで理解することができます。なるべく英語にカタカナをふらなくても読めるようにしましょう。		

【表英2】授業実践により明らかになったこと及び課題

位置付けた評価規準	授業実践により明らかになったこと及び課題
ペアワークを協力して行っている	観察法により、1単位時間に一部の生徒の活動状況を把握し、評価結果を蓄積した。しかし、単位時間によって言語材料や言語活動の課題が異なることから、言語活動の難易度をできるだけそろえて、判断のゆれが生じないようにし、評価の信頼性を高める必要がある。
言い方がわからないときに、いろいろな工夫をして、自分の考えを伝えようとしている	「参考資料」では、「関心・意欲・態度」の観点について、「理解できないところがあっても～工夫をして～」という「コミュニケーションの継続」を具体例としてあげている。そこで、「理解できないところがある」状況を教師が把握するための評価方法の工夫が必要である。また、この「継続」の観点は「表現の能力」の観点でとらえた方がより適切だと考える。
文法にしたがって正しく書くことができる	「知識・理解」「理解の能力」「表現の能力」のどの観点でとらえるべきか判断が困難である。どの観点の評価規準を位置付けるかについては、指導目標・教材・言語活動とのかかわりで判断する。
考えを相手に正確に伝えることができる	2文の発話だけでは「十分満足できる」状況をとらえることができなかった。「十分満足できる」状況をとらえる言語活動と、「達している」「達していない」かのどちらかでとらえる言語活動とを明確にしておく必要がある。

(4) 英語科の研究のまとめ

今年度は英語科の指導と評価の計画にしたがって、授業実践を行い実践結果の分析・考察を行ってその妥当性を検討しました。その結果、指導と評価の計画を作成することにより指導目標が明確になること、適切な評価の方法や用具を用いて実現状況を的確に把握することが、生徒の自己実現に結び付くこと、目標の実現状況を知らせることにより、学習意欲を高めることができることが成果として得られました。以上のことから、仮説の有効性について見通しをもつことができました。

今後は、英語科における実践的コミュニケーション能力が身に付いているかどうかを把握する妥当性(validity)と実施可能性(feasibility)のある評価方法の在り方について、さらに検討していく必要があると考えます。

【引用文献・主な参考文献・URL】

Canale, M. & Swain, M. (1980). Theoretical Bases of Communicative Approaches to 2nd Language Teaching and Testing. Applied Linguistics, 1,1.pp.1-47

松沢伸二、日本教育評価研究会、「指導と評価 vol.48 12」, 日本図書文化協会、2002年、 pp.17-20

静哲人、「英語テスト作成の達人マニュアル」, 大修館書店、2002年

[www./nc.uk.net/home.html](http://www.nc.uk.net/home.html)(NationalCurriculum)

<http://www.coe.int/portalT.asp> (ELP)